

ゾウメキ遺跡

福岡県八女郡黒木町大字本分所在遺跡の調査

黒木町文化財調査報告書

第3集

1996

黒木町教育委員会

ゾウメキ遺跡

福岡県八女郡黒木町大字本分所在遺跡の調査



1. ゾウメキ遺跡 東丘陵区南東端部の風倒木痕群（北東上空から）



2. 同 西丘陵区全景（北西上空から）

序

ゾウメキ遺跡は、矢部川北岸の河岸段丘とその背後に控える黒木盆地を直下に見下ろす中原丘陵上にあります。

黒木町においてもここ数年来、企業誘致による活性化の動きを受けて、キノコ栽培工場の進出をみるようになりました。

そこで、黒木町教育委員会では文化財保護の立場に鑑み、平成7年度、関係各機関と協議を重ねました結果、福岡県教育庁指導第二部文化課、並びに南筑後教育事務所より調整面において適切な指導と助言を賜わり、また黒木町役場企画振興課には実測の面で労を煩わせ、あわせて地元の方々からは直接の従事を得まして、迅速かつ無事に調査を完了する運びとなりました。

この調査により約550箇所の風倒木跡を検出し、過去2万年余りにわたる星霜をこの自然災害の痕跡から明らかにしたとの報告を得ました。

ここにその成果の一端を収録し、将来の参考の一助となるよう願ってやみません。

平成8年3月31日

黒木町教育委員会
教育長 中原 武

例 言

1. 本書は、黒木町がホクト産業株式会社から調査費用を受託し、同社のキノコ栽培工場建設に伴い破壊され、あるいは盛土保存される埋蔵文化財の発掘調査を、平成7年度に実施した遺跡の報告である。
2. 調査は、黒木町教育委員会が事業主体となり、福岡県教育庁南筑後教育事務所参事補佐 馬田弘稔が担当した。
3. 本書に収録した遺跡は、福岡県八女郡黒木町大字本分所在の「ゾウメキ遺跡」で、『黒木町文化財調査報告書』第3集として刊行するものである。
4. 遺構の実測は馬田が行い、教育事務所生涯学習課長 浜田信也の援助があり、撮影は馬田がたった。
また、平板測量に際しては町企画課・建設課の援助があった。
5. 気球による撮影は、空中写真企画がたった。
6. 遺物の整理・実測・レイアウト・製図は九州歴史資料館技師 杉原敏之と宇美町立歴史民俗資料館 平ノ内幸治が行い、撮影は福岡県教育庁指導第二部文化課整理指導員 北岡伸一がたった。
また、遺構図面の整理・レイアウトは馬田が行い、製図は整理指導員 豊福弥生の外に原カヨ子がたった。
7. 本書に使用した方向は磁北で、座標北は第2図 ゾウメキ遺跡遺構配置図に示した。
8. 本書の編集は馬田が行い、執筆は第3章第2節 遺物 と第4章第2節 石器について を杉原があたり、それ以外を馬田がたった。

本文目次

序

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査の経過と調査組織	2
1. 調査の経過	2
2. 調査の組織・関係者	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 遺構と遺物	5
第1節 遺構	5
1. おとし穴	5
2. 風倒木痕	6
3. その他の遺構と旧石器時代のグリット調査	12
第2節 遺物	12
1. グリット調査区の遺物出土状況	12
2. グリット調査区出土の石器	13
3. 風倒木痕出土の遺物	14
4. 表採遺物	19
第4章 おわりに	20
第1節 風倒木痕について	20
第2節 石器について	30

图版目次

- | | |
|--------|----------------------------------|
| 巻頭図版 1 | 1. ズウメキ遺跡 東丘陵区南東端部の風倒木痕群（北東中空から） |
| | 2. 同 西丘陵区全景（北西上空から） |
| 図版 1 | 1. ズウメキ遺跡 全景と東～南方地形（西～北上空から） |
| | 2. 同 西丘陵区と南方地形（北上空から） |
| 図版 2 | 1. 遺跡の全形（北西上空から） |
| | 2. 同 東丘陵区と南方地形（北上空から） |
| | 3. 同 東丘陵区南西端部の風倒木痕群・おとし穴（北東中空から） |
| 図版 3 | 1. 遺跡の東丘陵区全景（西上空から） |
| | 2. 同 東丘陵区北半部の風倒木痕群（西中空から） |
| 図版 4 | 1. 遺跡の西丘陵区と東方地形（西中空から） |
| | 2. 同 西丘陵区南半の風倒木痕群（東中空から） |
| 図版 5 | 1. ズウメキ遺跡完掘東丘陵区の1～4号風倒木痕（北から） |
| | 2. 同 5・6号風倒木痕（北から） |
| | 3. 同 7号風倒木痕（北から） |
| | 4. 同 8・9号風倒木痕（北から） |
| 図版 6 | 1. 東丘陵区の10号風倒木痕（北東から） |
| | 2. 同 11号風倒木痕（東から） |
| | 3. 同 12号風倒木痕（北東から） |
| | 4. 同 13号風倒木痕（北東から） |
| 図版 7 | 1. 東丘陵区の14～16号風倒木痕（北から） |
| | 2. 同 17～19号風倒木痕（南から） |
| | 3. 同 20号風倒木痕（北東から） |
| | 4. 同 21号風倒木痕（北から） |
| 図版 8 | 1. 東丘陵区の22号風倒木痕（北から） |
| | 2. 同 23号風倒木痕（南から） |
| | 3. 同 24号風倒木痕（北西から） |
| | 4. 同 25号風倒木痕（北西から） |
| 図版 9 | 1. 東丘陵区の26・27号風倒木痕（南から） |
| | 2. 同 28号風倒木痕（南から） |
| | 3. 西丘陵区の29・30号風倒木痕（東から） |
| | 4. 同 30・31号風倒木痕（東から） |
| 図版 10 | 1. 西丘陵区の32号風倒木痕（東から） |
| | 2. 同 33号風倒木痕（南西から） |
| | 3. 同 34・35号風倒木痕（西から） |

- 4. 同 36号風倒木痕（北東から）
- 図 版 11 1. 西丘陵区の37号風倒木痕（北から）
 - 2. 同 38・39号風倒木痕（北東から）
 - 3. 同 40～45号風倒木痕（北から）
 - 4. 同 46～50号風倒木痕（北東から）
- 図 版 12 1. 東丘陵区の51・52号風倒木痕（北から）
 - 2. 同 53号風倒木痕（南東から）
 - 3. 同 54・55号風倒木痕（南から）
 - 4. 同 56号風倒木痕（西から）
- 図 版 13 1. 東丘陵区の58号風倒木痕（西から）
 - 2. 同 59号風倒木痕（南西から）
 - 3. 同 60号風倒木痕（西から）
 - 4. 同 おとし穴〔57号土壇〕（西から）
- 図 版 14 1. 東丘陵区の62号風倒木痕（東から）
 - 2. 西丘陵区の63号風倒木痕（南から）
 - 3. 東丘陵区の64号風倒木痕（北から）
 - 4. 同 グリッド調査区（西から）
- 図 版 15 1. 東丘陵区のE-2グリッド（北西から）
 - 2. 同 E-2グリッド（北東から）
 - 3. 同 E-2グリッド（北西から）
 - 4. 同 B-3・4グリッド（北西から）
- 図 版 16 1. グリッド調査区・風倒木痕出土石器 表（上）・裏（下）
 - 2. 表採石器① 表（上）・裏（下）
- 図 版 17 1. 表採石器② 表（上）・裏（下）
 - 2. 表採石器③ 表（上）・裏（下）
- 図 版 18 1. 東丘陵グリッド調査区の作業風景（北から）
 - 2. 遺跡調査の関係者

挿図目次

第 1 図	ゾウメキ遺跡周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	4
第 2 図	ゾウメキ遺跡遺構配置図 (1/400)	4 ~ 5 間折込
第 3 図	ゾウメキ遺跡完掘57号土壇(おとし穴)実測図 (1/20)	5
第 4 図	栗崎遺跡調査風倒木痕の埋土平面プラン実測図 (1/60)	6 ~ 7 間折込
第 5 図	ゾウメキ遺跡完掘 1 ~ 5・11・13・24・27・32・33・49・62・64・72・ 73号風倒木痕実測図 (1/60)	8 ~ 9 間折込
第 6 図	ゾウメキ遺跡完掘 8・14・19・28・40~42・51・52・54・55号風倒木痕実測図 (1/60)	10
第 7 図	ゾウメキ遺跡完掘36・46・48・53・59・60・63・74号風倒木痕実測図 (1/60)	11
第 8 図	ゾウメキ遺跡グリット調査区の遺物出土状況実測図 (1/60)	13
第 9 図	ゾウメキ遺跡出土石器実測図① (2/3)	15
第 10 図	ゾウメキ遺跡出土石器実測図② (2/3)	16
第 11 図	ゾウメキ遺跡出土石器実測図③ (2/3)	17
第 12 図	ゾウメキ遺跡出土石器実測図④ (2/3)	18
第 13 図	ゾウメキ遺跡検出風倒木痕の痕平面プラン平板実測図 (1/100)	22
第 14 図	ゾウメキ遺跡完掘・検出風倒木痕の風倒方向	23

表目次

表 1	ゾウメキ遺跡の完掘風倒木痕一覧表①	24
表 2	ゾウメキ遺跡の完掘風倒木痕一覧表②	25
表 3	ゾウメキ遺跡の検出風倒木痕一覧表①	26
表 4	ゾウメキ遺跡の検出風倒木痕一覧表②	27
表 5	ゾウメキ遺跡の完掘・検出風倒木痕組列表	28
表 6	ゾウメキ遺跡出土・表採石器一覧表	30

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

黒木町では、中山間地勢の特質を生かした企業誘致を積極的に推進し、大型企業誘致の第1号として、ホクト産業株式会社が同町大字本分にキノコ栽培工場を建設することになり、平成7年7月に「開発事前審査願」が提出された。

町教育委員会では、19,796㎡に及ぶ開発予定地が打製石斧・石鏃などが散布する周知の中原山遺跡に近接することから、企業・町企画課と文化財の保護について協議を行い、町に文化財専門職員^{〔註1〕}がいないことから、「文化財の有無について」の分布調査を、8月28日に、福岡県教育庁南筑後教育事務所に依頼した。

教育事務所では、8月29日に現地踏査を実施し、ブドウ園・茶畑の現況下での開発予定地からの遺物の表採はできなかったが、隣接する西側畑地で、黒曜石片・サヌカイト片多数の散布を認め、『開発地内にも埋蔵文化財が存在することが十分に予期され、試掘調査を実施する必要がある』旨の回答した。

試掘は、9月20・21日に教育事務所が担当し、重機のバックホーを用いて、ブドウ・茶の樹木を除去しつつ、作付者から短期・最小の範囲の了解を得て、幅1.5mで第2図の東・西丘陵の稜線沿いとこれに直交して試掘溝を設けた。

試掘溝からは、ほぼ全面にわたり、径約1m・長さ2m前後の隅丸長方形～長円形土壇様プランが出土した。

事務所は試掘成果として、①多数の土壇様プランの規模・方向に規則性が認められ、②表土中からは黒曜石・サヌカイト片は出土するものの、③土器片の出土が無いことや、④地山と土壇埋土との境界が不明瞭で埋土が硬く、⑤標高が約160mと高所に立地することなどを考慮し、『縄文時代前期前後頃の土壇墓・おとし穴などの遺構が存在し、旧石器時代の遺構も遺存することも予期されるので、開発事前の発掘調査を含めた文化財の保護措置をとる必要がある』旨の回答をした。

町教育委員会では、上記の回答について企業・企画課と協議し、明確な（具体的な）遺構・遺物を検出ための調査を、県教育委員会指導第二部文化課に要請したため、再度の試掘を、文化課・事務所が9月27日に実施した。

再試掘は、土壇2基（後述の36号風倒木痕他1基、第2図）を発掘し、この2基については土壇墓・おとし穴ではないことを確認したが、36号風倒木痕からは弥生時代の土器細片が1点出土したため、1次試掘の土壇群のなかには、大型の掘立柱建物の柱穴も考慮する必要も一部に出てきた。

以上の試掘成果を得て、企業・町企画課と町教育委員会・県教育委員会が協議し、『工場2棟の建設に際しての当初の削平整地案を撤回し、予定地内に所在する最高標高部の高さまで全体を盛土成地し、工場建築に伴う基礎工事については最小限の掘削工事とすること』とし、『発掘調査も、この掘削に因って破壊される部分を実施する』こととなった。

なお、遺構の分布状態を把握するために、『表土の除去を掘削部周辺にまで広げる』ことも了解事項となった。

第2節 調査の経過と調査組織

1. 調査の経過

調査は、10月11日に表土除去のためバックホーを投入し、11月12日の気球写真撮影後、若干の補測作業を継続し、11月20日に現場を撤収して終了した。

また、補測作業の間を中心に、九州歴史資料館の杉原敏之氏の協力を得て、旧石器時代の調査を実施した。

2. 調査の組織・関係者

調査・整理・報告の組織と関係者は、下記のとおりである。

黒木町教育委員会

総括 教 育 長	中原 武	生涯学習課長	村方氏治
庶務 生涯学習課	社会教育係長	堤 保光	
	同和教育係長(社会教育主事兼任)	森田和喜	
	主幹 井上龍児	主査 服部智子	
	書記補 内藤啓介	用務員 中村文廣	社会教育指導員 檜室修一
企画振興課	課長 大谷廣人	企画係長 山口義治	商工観工係長 井手口英輔
	広報係長 稗田恭宏	主幹 永石富重	主事 馬場アユミ

福岡県教育委員会

調査 教育庁南筑後教育事務所

生涯学習課長 浜田信也

参事補査 馬田弘稔 (第1・2次試掘調査、本調査)

教育庁指導第二部文化課

参事補佐 小池史哲 (第2次試掘調査)

なお、町企画振興課長 大谷廣人・企画係長 山口義治・商工観光係長 井手口英輔・主事 馬場アユミ・臨時職員 城 由利子氏には平板測量、九州歴史資料館技師 杉原敏之・宇美町立歴史民俗資料館 平ノ内幸治氏には旧石器時代その他の整理報告に際して多大な御協力を得、南筑後教育事務所生涯学習 浜田信也・大津重明・江上靖則・小野智明氏、ホクト産業株式会社をはじめ多くの方々・諸機関にお世話になった。感謝致します。

発掘調査従事者

石井イツエ	石井 好子	井手キクエ	井手十三男	井手 ゆみ	江田シツカ
加藤トミヨ	茅島 幸子	川上みどり	川津 幸	久間ツタエ	栗山 善蔵
古賀キミエ	古賀 享	酒井シヅエ	酒井チドリ	内藤美知代	内藤ミツキ
内藤ミフミ	中小原ミヨシ	中村 久子	中村 博子	中村富士枝	原 信子
原 久子	東 智美	樋口 久子	森田 勇	柳田キクエ	柳田 節子
柳田トメヨ	山下 始	山下ミスエ			

註1. 『福岡県遺跡等分布地図(八女市・八女郡編)』(福岡県教育委員会、1980)

第2章 遺跡の位置と環境

遺跡は、福岡県八女郡黒木町大字本分2486-5外37筆に所在する。

黒木町は、県南東端部に位置し、東は矢部村を経て大分県中津江村に至り、南は標高942mの星原村を介して熊本県鹿北町に至る。

八女郡域内での行政界では、北を約160mの中原丘陵を介して上陽町、567mの高峰や599mの大山を介して星野村、東を942mの石割岳を介して矢部村と接し、西は県下で筑後川に次ぐ一級河川の矢部川に沿う唯一の国道442号線の長野隧道を経て、平野部の八女市へと開ける。

以上のように、町は行政界を高い山々に囲まれた盆地形を呈し、『福岡県遺跡等分布地図』^(註1)（以下、『分布地図』と略）記載の102箇所の文化財の内実にもこの山間地勢の特質がよく示されている。

『分布地図』では、現存・伝承を含めて平安～江戸期の神社・寺院を38箇所、樹齢600年といわれる国指定「黒木のフジ」や県指定「霊巖寺の奇岩」などの天然記念物を6箇所、黒木氏の祖源助能が山門郡瀬高荘管理のため、仁安2年（1167年）に大隅国から黒木郷に移った時に始まり、以来、黒木氏の拠城として天正12年（1584年）の落城まで続いた県指定史跡「猫尾城跡」などの山城・陣屋跡^(註2)を12箇所を載せる。

また、窯跡として須恵器出土の「田本1号窯跡」のみを載せるが、他に「今村焼窯跡」・「鹿子生焼窯跡」などの江戸期のものも所在し、南北朝～江戸期の石塔・板碑^(註3)を17箇所を載せる。

なお、縄文時代の散布地として14箇所も載せるが、町内での発掘調査は、過去、既述の「猫尾城跡」と「城ノ原遺跡」の2件だけで、詳細は不明であった。^(註4)

「城ノ原遺跡」では、縄文時代前期の撚糸文・列点文・条痕文や晩期の深鉢などの土器や黒曜石製石鏃・サヌカイト剥片などが出土し、近世の掘立柱建物なども検出されているが、縄文時代の竪穴住居・石組炉などの明確な遺構は出土していない。^(註5)

また、近隣の星野村では「大草平遺跡」の調査で、縄文時代の押型文・撚糸文土器や中期の土器・石鏃などと層位的には混在した状態で、旧石器時代のナイフ形石器・細石刃などが出土している。^(註6)

上述の「城ノ原遺跡」や「大草平遺跡」の調査例から、既述した山間地勢の特徴として、黒木町内には『分布地図』掲載箇所以外にも多くの旧石器～縄文時代の遺跡が所在するものと考えられ、後述するように、「ゾウメキ遺跡」の発掘調査でも旧石器～縄文～弥生時代の遺物が、旧石器時代以降の風倒木痕埋土やグリット調査区から出土した。

今後の詳細な遺跡分布地図作成事業が待たれるところである。

註1. 『福岡県遺跡等分布地図（八女市・八女郡編）』（福岡県教育委員会，1980）

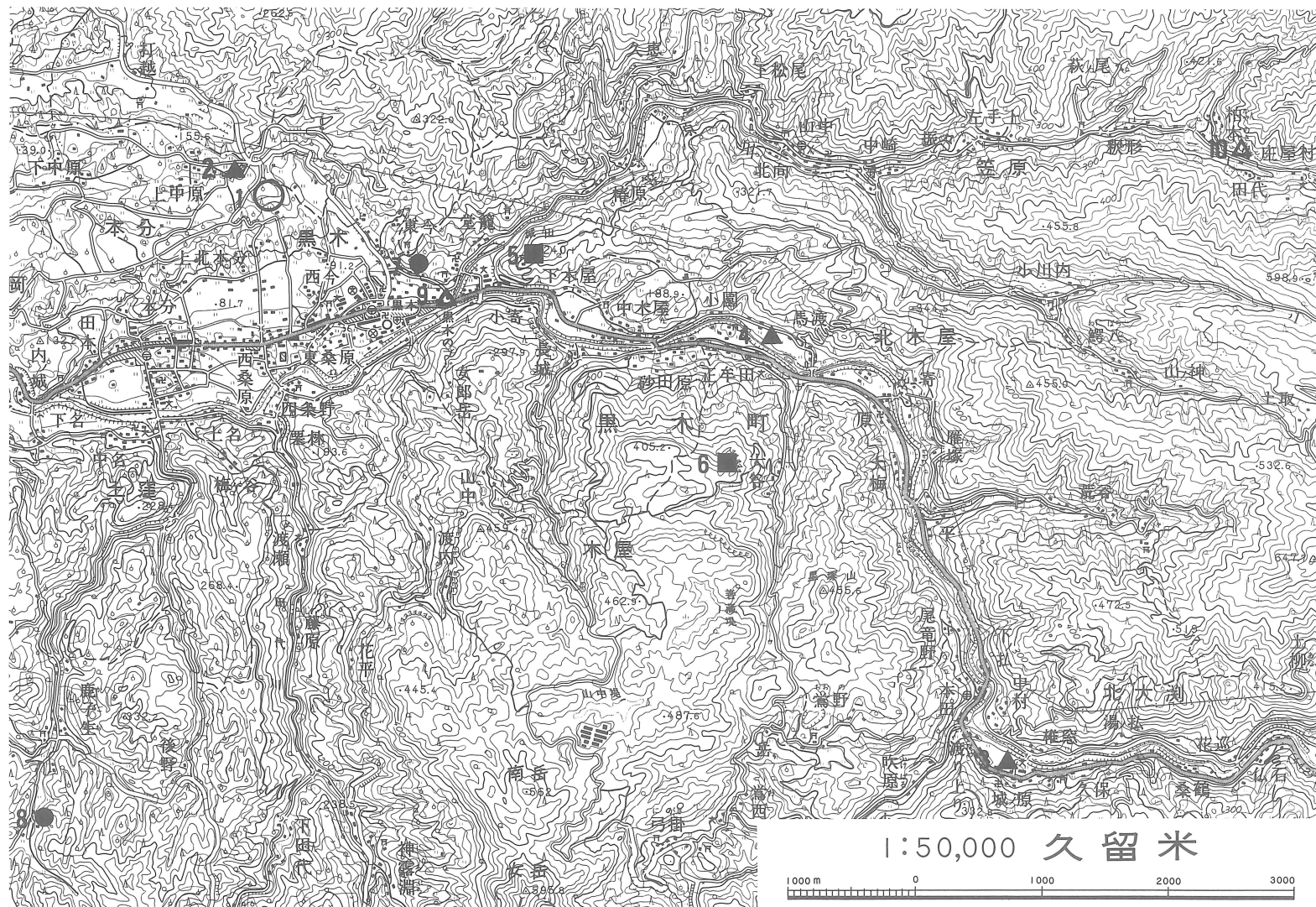
註2. 佐々木隆彦編「猫尾城址」（『黒木町文化財調査報告書』第1集，黒木町教育委員会，1991）

註3. 伊崎俊秋編「城ノ原遺跡」（『黒木町文化財調査報告書』第2集，黒木町教育委員会，1995）

註4. 註2に同じ。

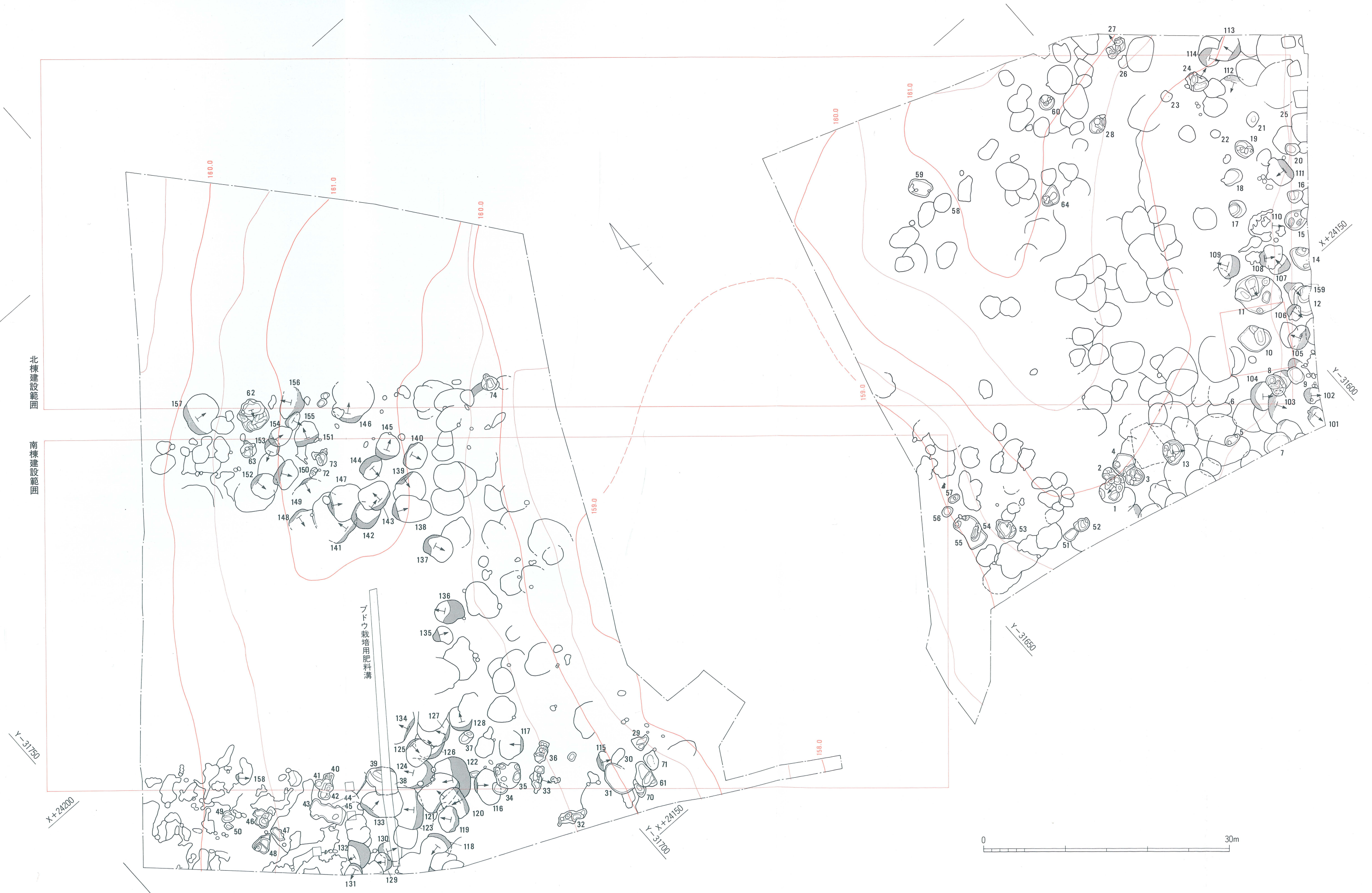
註5. 註3に同じ。

註6. 木下修編「大草平」（『星野村文化財調査報告書』第1集，星野村教育委員会，1983）



1. ゾウメキ遺跡
2. 中原山遺跡
3. 城ノ原遺跡
4. 馬渡遺跡
5. 猫尾城跡
6. 喬華城跡
7. 今村焼窯跡
8. 鹿子生焼窯跡
9. 黒木のフジ
10. 霊巖寺の奇岩

第1図 ゾウメキ遺跡周辺の遺跡分布図 (1/50,000)



第2図 ゾウメキ遺跡遺構配置図 (1/400)

第3章 遺構と遺物

第1節 遺 構

出土した主な遺構は、約550基（箇所）前後の風倒痕で、東丘陵区から約250基・西丘陵区から約300基の多数に及ぶ（第2図）。

また、おとし穴は東丘陵区から1基が確認され、その他に両丘陵区から若干の柱穴様小ピットが検出された。

1. おとし穴

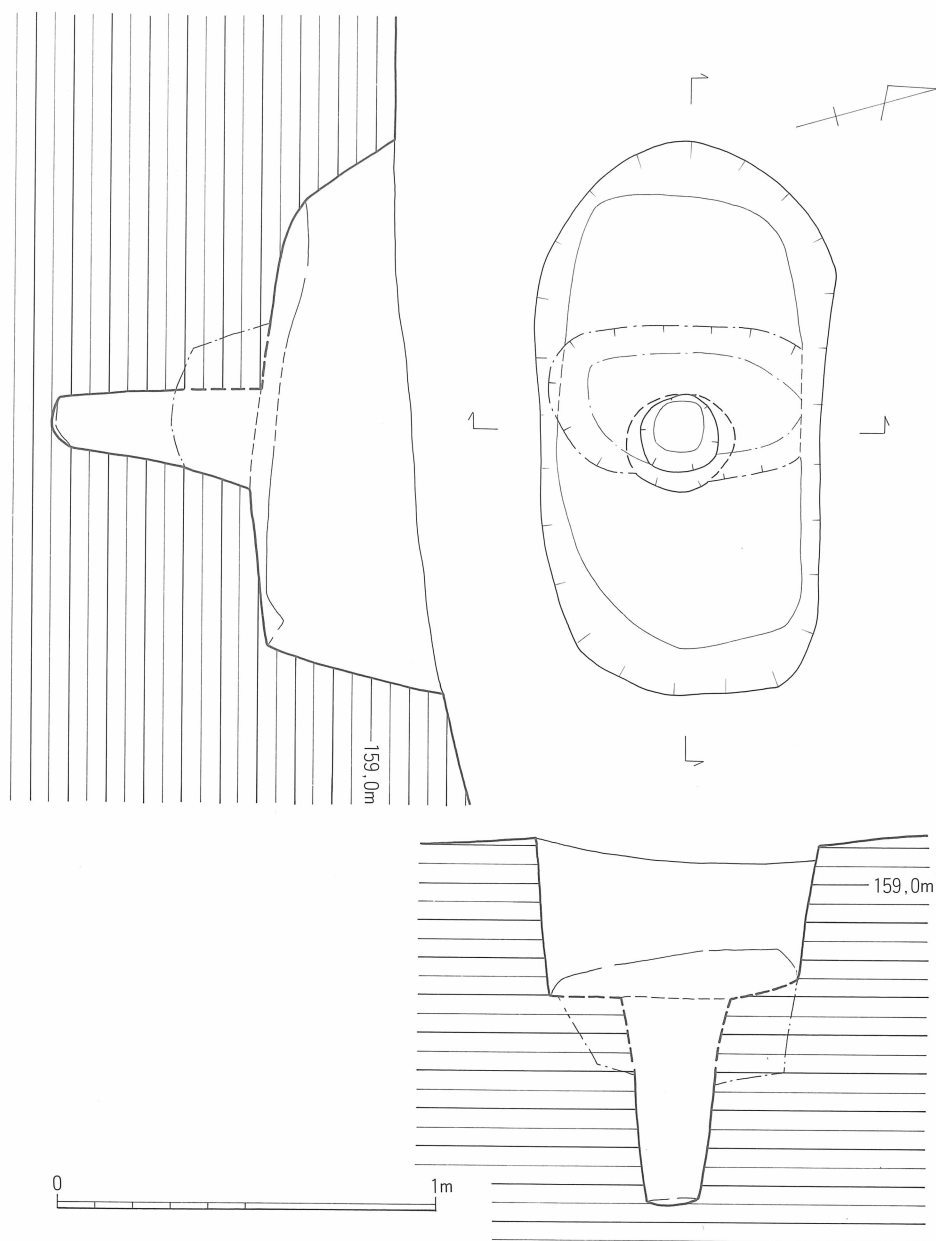
57号土壙（図版13-4、第3図）

検出作業の際、調査区内での出土位置や平面プラン・埋土状態などの特徴から、おとし穴の可能性が強いと判断していたものである。

平面プランは隅丸長方形を呈し、縦断図部長147cm・横断図部幅74cmを測り、床面までの深さは東壁部で47cmが遺存する。

壁面の傾斜角は、現状で南・北壁が約82°、東・西壁が約56°～76°で、床面レベルは中央部が若干低い。

出土位置は、第2図に示すように、東丘陵区南西端で西側緩傾斜面部の標高159.0mの等高線にほぼ直交する地点で、主軸はN-74°-Wを測る。



第3図 ゾウメギ遺跡完掘57号土壙（おとし穴）実測図(1/20)

159.0mの等高線は、西丘陵区に破線で図示したように連続し、両調査区間が谷地形を呈することが試掘によって確認されており、他の遺跡例のように、標高158.5m前後の等高線沿いに谷頭地形を考慮して扇状に複数配置されたことが十分に考えられるが、表土除去土の集積地確保その他の事由で、両丘陵区間が未調査となり、配置状態を確認できなかった。

なお、床面中央部からは、径28cm・深さ55cmのピットを検出した。

ピット内部の埋土は、土壌・ピット壁の黄褐色～赤褐色粘質の地山土に、削平された上層の茶褐色粘質地山土と暗褐色土が混入したもので、土壌部埋土と大略同じであった。

他の遺跡出土のおとし穴内ピット例のなかに、径5cm前後の小ピットが検出されるものがあるので、ピット内部の掘り下げは慎重に進めたが、確認していない。

上記のことから、ピット内に丸太様のものを1本配したものか、棒様のものを複数配したものは不明である。

2. 風倒木痕

東・西丘陵区で出土した約550基前後（図版1～4）のなかで、第2図には、表土をバックホーで除去後、①作業員による遺構の平面プラン検出作業までを実施し、その平面プランを1/100で平板測量したもの（101号～159号風倒木痕及び無番の風倒木痕）と、②検出後に発掘作業まで実施し、1/20で遺構実測したものだけの限って、東丘陵区で約200基・西丘陵区で約140基を図示した。

したがって、平面プラン検出作業未実施のものについて、東側丘陵西側の約50基と西丘陵北側・西丘陵中央部西半の約150基の配置状態を掲図していない。

本項では、上記例のなかで、完掘例（表1・2）についての説明をし、1/100平板測量のみ例（表3・4）については、第4章第1節（本文20頁以下）で一括して説明する。

なお、当遺跡では上述のように約550基前後ものあまりにも多量の風倒木痕が広範囲に重複出土し、加えて前章で既述のように短期・最小限の調査としたなど諸般の事由により、土層観察はした断面図を一切作成していないなどの不備があるので、筆者調査・報告の福岡県小郡市・大刀洗町の栗崎遺跡例（第4図）を紹介して事前の補足説明とする。

（註1）

栗崎遺跡出土の風倒木痕

栗崎遺跡では、1～6号の風倒木痕が出土しているが、以下では1～4号例を紹介する（第4図）。

また、説明にあたり、風倒木痕を完掘後の平面プランを**痕平面プラン**、発掘前の風倒木痕内の各埋土検出上面プランを**埋土平面プラン**と呼称する。

（1）4号風倒木痕

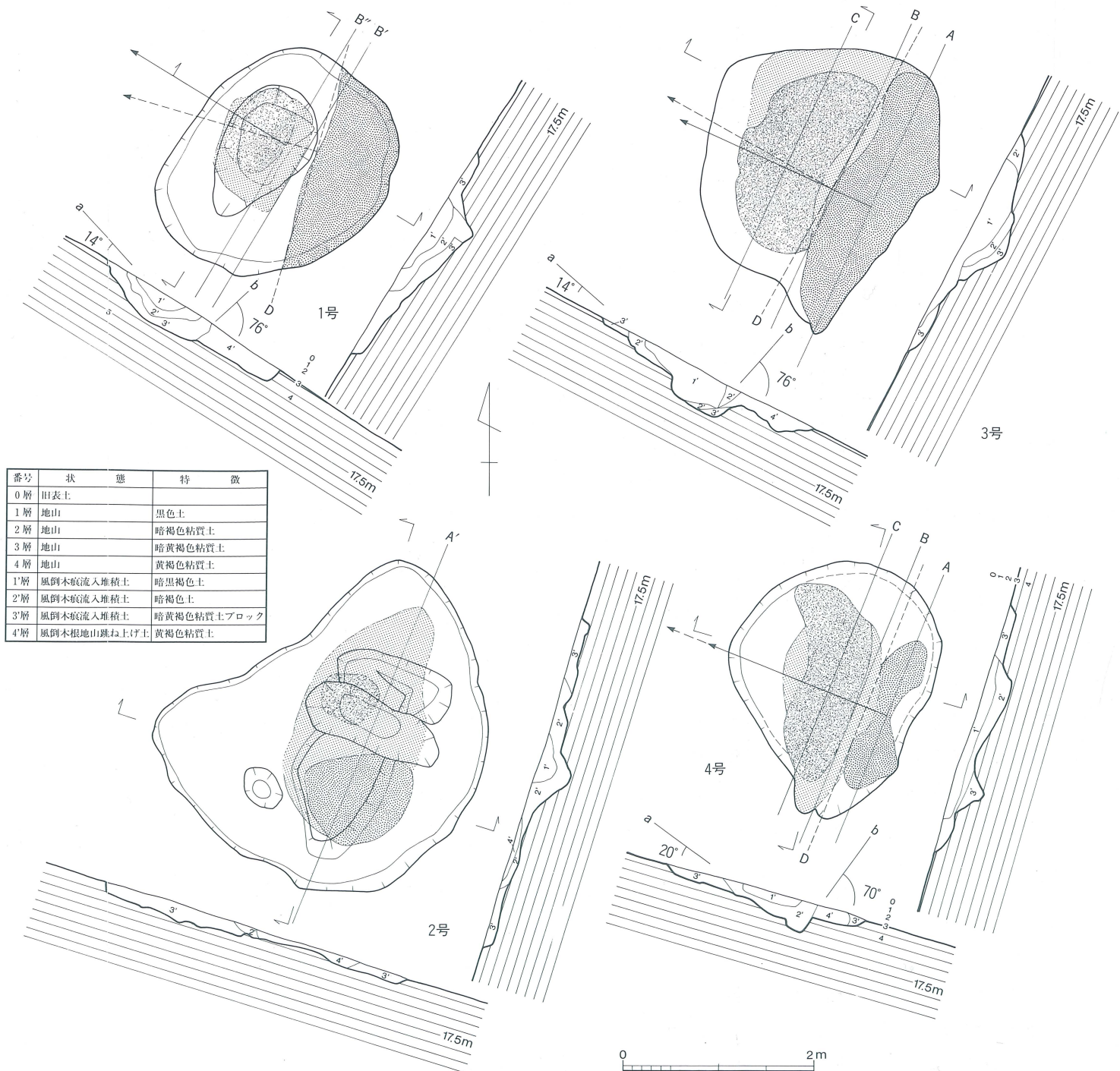
痕平面プラン

痕平面プランは、東西断面部以北が半円形を呈し、同以南は南北断面部の土層2'・3'南端部が突出する。

痕平面プランの規模は、東西断面部が217cm・南北断面部が270cmで、1～3号同様に南北断面部の方が大きく、東西断面部が小さい。

埋土平面プラン

埋土平面プランの切り合い関係を古→新で記すと、土層断面図に示すように3'→4'→2'→1'と一見されるが、4'は黄褐色粘質土地山が樹根に因って跳ね上げられ、その塊が落下着地したもので、3'は4'を一部浸食しながら混流入堆積したもの、2'は3'・4'を浸食しながら流入堆積したものであるから、4'→



第 4 図 栗崎遺跡調査風倒木痕の埋土平面プラン実測図 (1/60)

3'→2'→1'と示すべきである。

ところで、1～4号のなかで、2号を例外として、1'・4'の埋土平面プランはいずれも略南北方向に長く、略東西方向に短い。

上記の埋土平面プランの方向による長・短の特長は、前述の痕平面プラン規模の方向による大・小（南北断面部の方が大きく、東西断面部が小さい）の特長に一致する。

以上のことや、後述する埋土の特徴などから、埋土平面プランのなかで、4'埋土平面プランは、西側中央部を2'に切られる（3号も同様である。）が南・北端部の形状は旧状をほぼ保っていることから、この南北端を結んで得た中軸線が長軸Aである。

なお、2号については、4'埋土平面プランが円形に近いために上記同様には長軸Aを求められないが、4号例で1'・2'埋土平面プランも4'埋土平面プラン同様に南北方向に細長いことから、2'埋土平面プランの南・北端を結んで長軸A'を得たものである。

上述の長軸Aからは、4'埋土平面プランが長軸Aを介して東・西にほとんど対象の平面プランを呈すことが看取でき、同様にして得た3号の長軸Aでもこのことは看取できる。

また、長軸Bは、長軸Aと平行し、1'埋土平面プランのなかでほとんど直線状を呈す東側プラン部への接線として得たものである。

なお、3号では1'埋土平面プランのなかで東側に張り出す南・北端両部の各東端を結んで得た接線が、長軸Aと平行することから、これを長軸B'とし、1号では2'埋土平面プランのなかでほとんど直線状を呈す東側プラン部への接線として得たものを長軸B'とした。

前述の長軸Bからは、1'・4'埋土平面プランの両者が、長軸Bを介して、東・西にほぼ対象の位置に、また、大略一致する形状の特徴を示して所在することが看取でき、3号の長軸B'でもこのことは看取できる。

また、1号でも1'・4'埋土平面プランの両者が、長軸B'を介して、東・西にほぼ対象の位置に所在する。

加えて、長軸Cは、長軸Aと平行し、1'埋土平面プラン中央部の東端—西端間の中心を通る線として得たものである（3号の長軸Cも同様で、1・2号では同様にして得た長軸Cの図示を略す）。

上記の長軸Cからは、1'～3'のいずれの埋土平面プランも、長軸Cを介して、東・西にほぼ対象の平面プランを呈することが看取でき、1・3号の長軸Cでもこのことは看取できる。

また、2号でも上記のことは大略同様に指摘できる。

(2) 1号風倒木痕

痕平面プランは、南北断面以東が円形・同以西が隅丸方形を呈す。

埋土平面プラン

3'を除去すると、2'埋土平面プランとはほぼ一致する3'下面で、東西94cm・南北154cm・検出面からの深さ約35cmの窪地を検出した。

(3) 2号風倒木痕

痕平面プランは、南北断面以東が1号同様に円形プランを呈す。

埋土平面プラン

2'を除去すると、長軸A'に対し、南半部では平行して長軸を有する東西102cm・南北128cmの地山盛り上がり部（盛り上がり高約5cm前後）を、北半部では直交して長軸を有する窪み部（検出面からの深さ36cm）を検出した。

(4) 3号風倒木痕

痕平面プランは、隅丸不整形プランを呈す。

埋土平面プラン

完掘して1'～4'を除去していれば、1・2号同様の窪み部などが検出されたであろうことが、東西・南北両断面に示されている。

ゾウメキ遺跡出土の風倒木痕

1・2号風倒木痕（図版5—1、第5図）

埋土平面プラン確認の段階で、東半部のほぼ全体が風倒木の根（以下、風倒木根と略）が地山を抱いたまま持ち上げた「地山跳ね上げ土」の黄褐色粘質地山土による埋土であることを確認し、また、西半部が暗茶褐色の流入土であることも確認していたが、当遺跡で初めて掘り下げる風倒木痕例であったため、一応、西半部を1号・東半部を2号としたものである。

完掘後の痕平面プランで、予期した通りに、東半部が、西半部より床面レベルが深く・凹凸が著しいことも追認できたことから、1・2号とした本例は、両者で単一の風倒木痕とした。

3・4号風倒木痕（図版5—1、第5図）

3号と4号は、4号風倒木根による黄褐色粘質地山跳ね上げ土が、一部を残して3号に因る黄褐色粘質地山跳ね上げ土（北西半部に位置）から切られるため、3号が新しい。

3号の痕平面プランは、南東半部の平坦な床面が北西半部の凹凸の著しい床面よりも極端に浅い。

上記の特徴は、13号（第5図）の痕平面プランの特徴とも一致し、また、埋土平面プランの特徴も同様に13号に一致して黄褐色地山跳ね上げ土が北西半部に位置していた。

ところで、以上の特徴の一致は、後述の64号（第5図）でも指摘することができ、また、この3例には痕平面プランにおいて、中央部で赤褐色粘質土地山面が半円形状に検出される（地山が突出する）と言う特徴も指摘でき、この地山突出の状態は、記述の栗崎遺跡出土の2号風倒木痕で4'層の削平が進めば中央部の地山面が同様の検出状態となるものである（第4図）。

上記の地山突出の特徴は、主根が痕平面プランの中央部（半円形状突出部）上に所在しなかったことを示すものであるが、このことを、主根の位置が3・13号例では北西半部・64号例では西半部の床面レベルが深い凹凸部側に片寄って位置していたと考えるより、むしろ、3例共に、主根を当初から幹元直下に持たない樹種（明確な主根を持たずに、幹元下の周辺部に枝根のみを有する樹種）と考える方が妥当であろう。

27号（第5図）も、上述例としてよく、東半部の痕平面プランは削平に因って遺存しないものであろう。

5号風倒木痕（図版5—2、第5図）

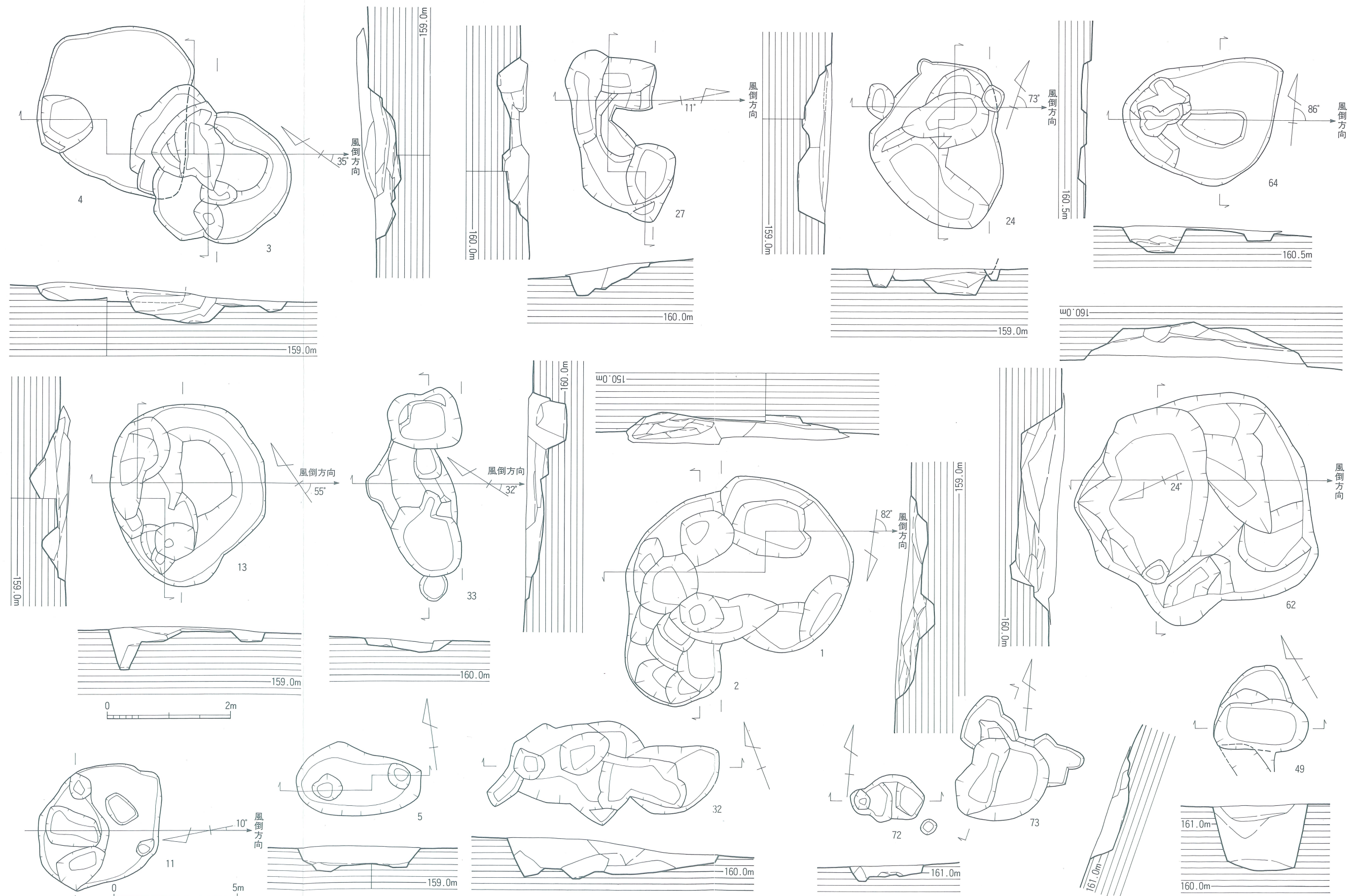
痕平面プランは、既述の1～4・13・64号例と異なり、206cm×96cmの長楕円形状を呈し、床面の東・西両端部にピットを有し、大略形は既述第3図の57号土壙（おとし穴）に似る。

しかし、埋土は、北・南側の無番号の風倒木痕を切る（新しい）ため、その埋土を再度跳ね上げたことを示す黄褐色・茶褐色・暗褐色三者のブロック混在土で、57号土壙（おとし穴）の暗茶褐色流入堆積土とは異質の埋土であった。

また、床面中央部に57号例のようなピットが所在せず、落とし穴は57号例のように谷部への傾斜面部に多いことなどからも風倒木痕と考えられ、規模が小さい事由は、5号は13号の北西半部の深い部分のみが遺存したものか。

11号風倒木痕（図版6—2、第5図）

当遺跡出土例で痕規模が6mクラスのもの、この11号（600cm×480cm）と25号（640cm×480cm）



第5図 ゾウメキ遺跡完掘1～5・11・13・24・27・32・33・49・62・64・72・73号風倒木痕実測図（1/60, 11号のみ1/150）

の2例しかなく、最大規模の風倒木痕である。

24号風倒木痕（図版8—3、第5図）

痕平面プランの検出上面の大略は、西半部が半円状を呈し、東半部が東方に内湾気味の弦状を呈す。

また、底部の痕平面プランも、一段と低い床面のピット3個がくの字状に連続して折曲する。

以上のことと、黄褐色粘質地山跳ね上げ土の痕平面プランが西半部で東方に内湾して検出されたことから、風倒方向をN-73°-Eと計測した。

なお、痕平面プランの浅い床面部が削平された例の遺存形状例が27号（第5図）や第2図の110号（東丘陵）・148号（西陵陵例）などであろう。

32号風倒木痕（図版10—1、第5図）

痕平面プランは、19号（第6図）の円形・52号（同6図）の隅丸長方形・60号（第7図）の隅丸形状と異なり、33号（第5図）・36号（第7図）と共に、多くのピットがほぼ直線状に連続し、埋土はいずれも黄褐色粘質地山跳ね上げ土のみであった。

このことは、既述のように、32・33・36号の3例が黒褐色～暗茶褐色の流入土（痕平面プランの一段浅い部分）が削平された状況を示すもので、西丘陵の旧地形は、116号—117号以東も現状より緩斜面であったことを示そう。

換言すれば、33・36号例とは長軸方向が異なる32号例もあることから、急斜面地に繁茂していた事由で地形の斜面方向に倒れたものではなく、強風が原因で、方向を異にして倒れた、所謂、風倒木痕であることの証左になるであろう。

38・39号風倒木痕（図版11—2、第2図）

埋土平面プランが不明瞭で、別番号としていたが、中央部の攪乱溝壁面の土層観察から、同一の風倒木痕であることを確認した。

40～42号風倒木痕（図版11—3、第6図）

検出時の痕平面プランで、他の例と異なり、41号と付した部分が北側に突出していたため、東端部を40号・西端部を42号としたが、完掘までの埋土観察の結果、同一の風倒木痕であることを確認した。

43～45号風倒木痕（図版11—3、第2図）

上述同様に掘り下げの段階で、同一の風倒木痕であることを確認した。

49号風倒木痕（図版11—4、第5図）

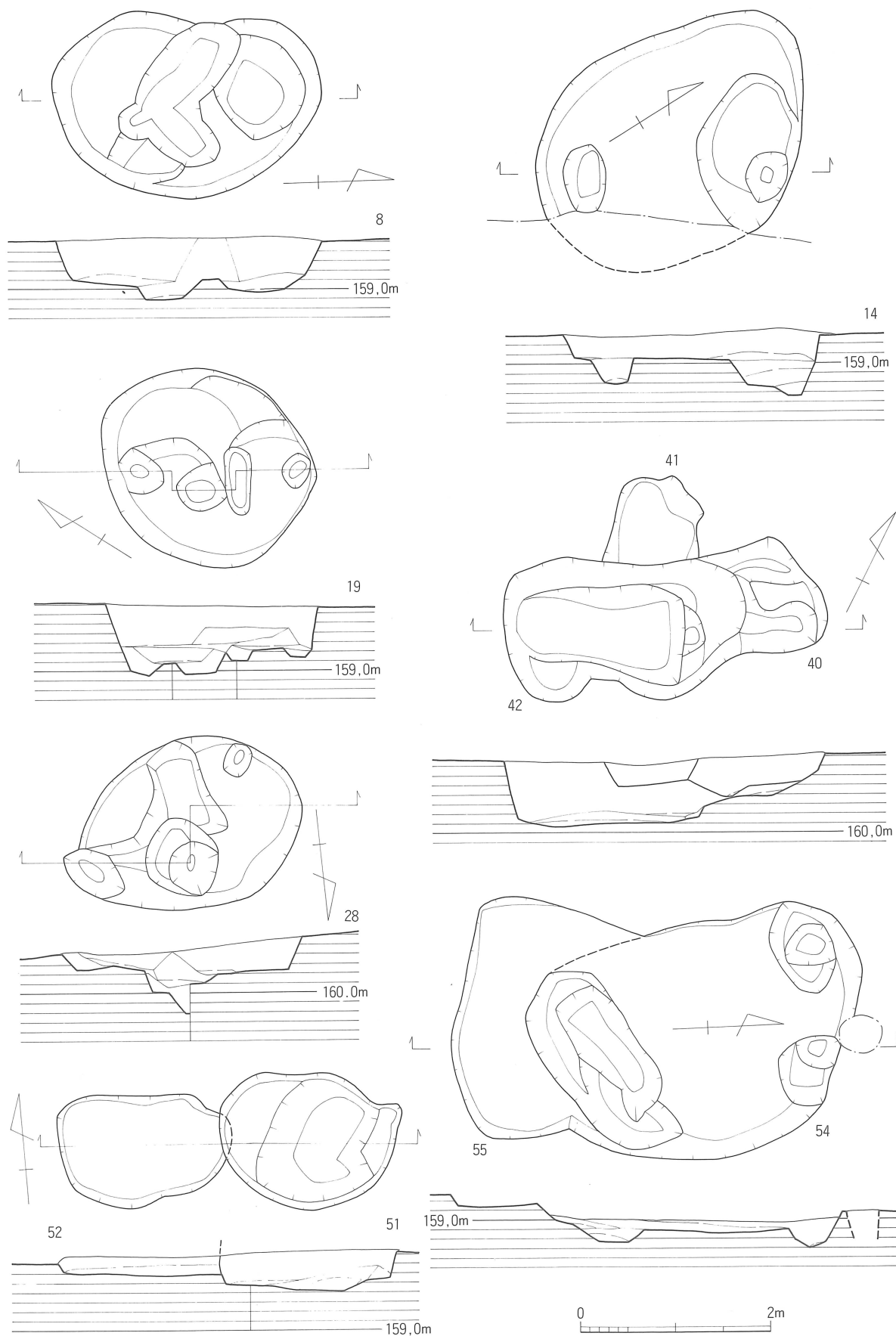
埋土は暗茶褐色土で、黄褐色粘質土が認められず、当遺跡出土通有の風倒木痕例と異なり、異平面プランも同様に異なる。

東丘陵西緩斜面出土の57号土壙（落とし穴）（第3図）に平面プラン・埋土状態が類似し、57号同様に西丘陵の西緩斜面から出土していることから、床面からのピットは確認されなかったが、落とし穴の可能性も強い。

一段深い南側土壙部の規模は、152cm×84cmの隅丸長形状で、深さ96cmを測る。

53号風倒木痕（図版12—2、第7図）

63号（第7図）と共に、略円形の痕平面プラン中央部が比較的大きいプランで一段深く、既述の3・13・64号の痕平面プラン（中央部突出）例とは著しく異なる。



第6図 ゾウメキ遺跡完掘8・14・19・28・40～42・51・52・54・55号風倒木痕実測図 (1/60)

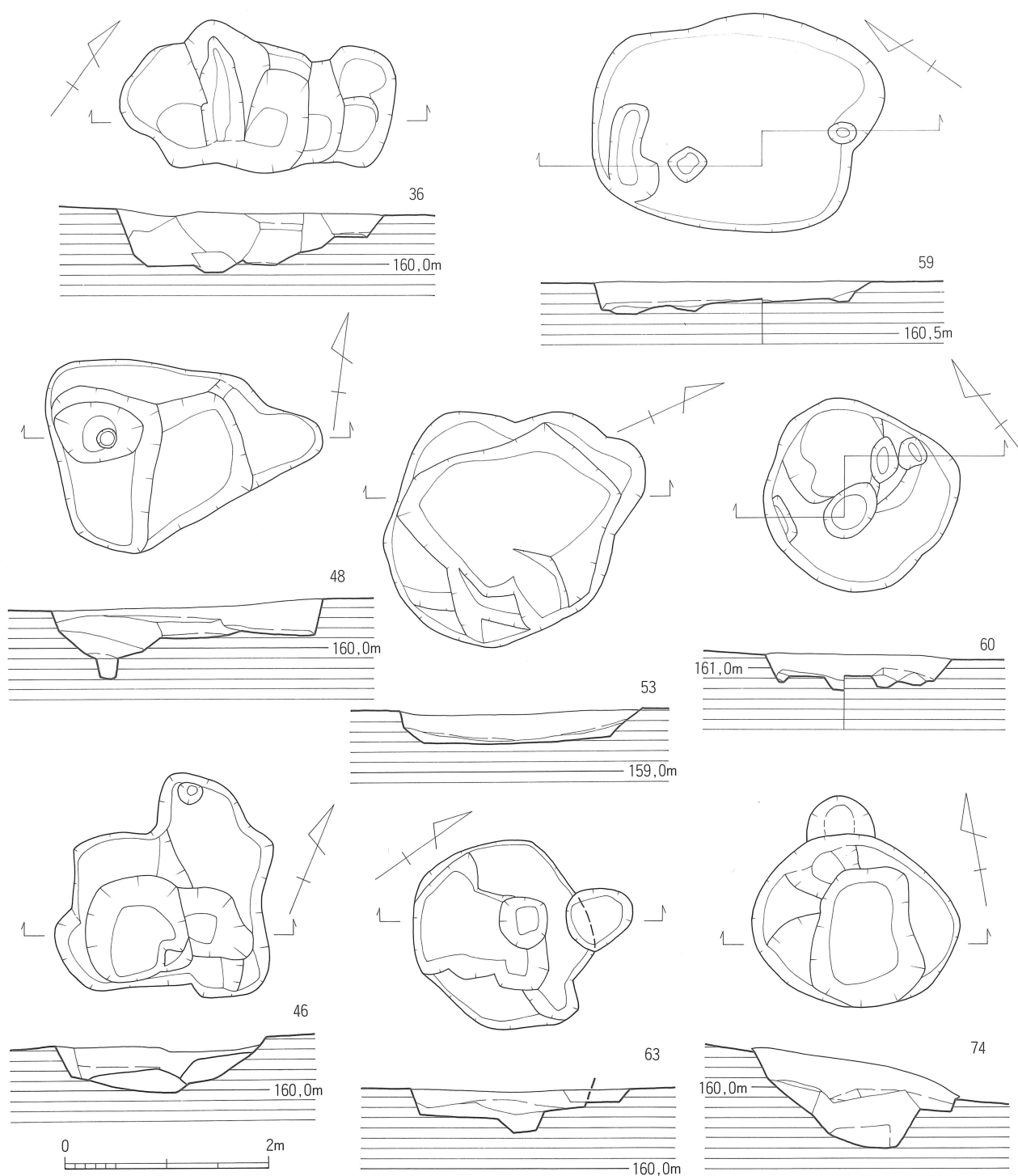
埋土平面プランも、黄褐色粘質地山跳ね上げ土が壁沿いに認められなかった。

上述のことなどから、53・63号は3・13・64号例（幹元下が枝根）とは異なり、幹元下主根有りの樹種と考えてよいものか。

54・55号風倒木痕（図版12—3、第6図）

埋土平面プランによる54・55号の区別は不明瞭で、同一風倒木痕の可能性も残る。

削平が著しく、西側の壁高はほとんどない。



第7図 ゾウメキ遺跡完掘36・46・48・53・59・60・63・74号風倒木痕実測図（1/60）

72・73号風倒木痕（第5図）

72・73号は共に赤茶褐色粘質地山跳ね上げ土で、第A図には、両者の出土位置を配置状態のまま示した。

両者全体の配置は逆L字状を呈し、むしろ一連の同一風倒木痕で、北西方向に風倒し、一段浅い北西半部は削平によって痕平面プランが消滅したものと考えられる。

3. その他の遺構と旧石器時代のグリッド調査

東・西両丘陵区からは、第2図に示すように、径30cm前後の柱穴様ピットや径50cm前後の土壇が若干検出されたが、連続した方向性や出土遺物がなく、その性格・時代共に不明である。

また、試掘調査の段階で、主軸に一定の方向性が認められた土壇様のプランのもの（大形土壇群）については、この大形土壇群を弥生時代の大型掘立柱建物の柱穴掘形の可能性も一部に考えられてはいたが、既述のとおり、この土壇様プランが一定の方向性も有す風倒木の埋土平面プランの一部（第4図1'層）であることが確認された。

ところで、既述の風倒木痕の埋土からは、旧石器時代に属すると考えられる黒耀石・サヌカイトなどの細剥片が出土していたことや、遺跡の立地から、東丘陵区で旧石器時代のグリッド調査区を設定した（第2図）。

グリッド調査区は、西丘陵区ではブドウ・茶畑への開墾に因る削平が著しく、赤褐色～黄褐色粘質土地山（地山風化母岩を含む）の露出地形となっていたため、暗褐色～褐色～明茶褐色粘質土や赤褐色粘質土（ローム層）が残存し、阿蘇-4の噴出物が認められた東丘陵区の南東隅部に設定した。

調査区は、10号風倒木痕を中心に8m方形とし、2mグリッドに細分して、3グリッドを掘り下げた（図版15、第2図）。

また、調査区南方の5号風倒木痕近くで、現表土面以下の土層観察も実施した。

註1. 小川泰樹・馬田弘稔編「栗崎遺跡」

（『福岡県文化財調査報告書』第120集，1995，福岡県教育委員会）

第2節 遺物

1. グリッド調査区の遺物出土状況（第8図）

基本層序については、遺跡内がすでに風倒木痕などで大きく攪乱・削平を受けており、堆積状況を観察できる良好な場所が残っていない。

遺跡東側の斜面付近の観察では、耕作土直下の赤褐色のローム層中が石器包含層となり、その下層に明赤褐色ローム層が堆積して基盤となる。しかし、赤褐色ローム層の上面では、縄文時代の石器等が出土しておりかつ、下層にはAso-4起源の噴出物である小礫や黒耀石が包含されていることから堆積が良いとは言えない。ただし、斜面付近での観察と言うことを考慮すれば、遺跡中央部の緩斜面での土層はより安定していたであろう。

調査グリットは2×2mを基本に、石器包含層である赤褐色ロームが残存する東側斜面に設定し、実際の調査面積は64㎡で、3グリットを完掘した。

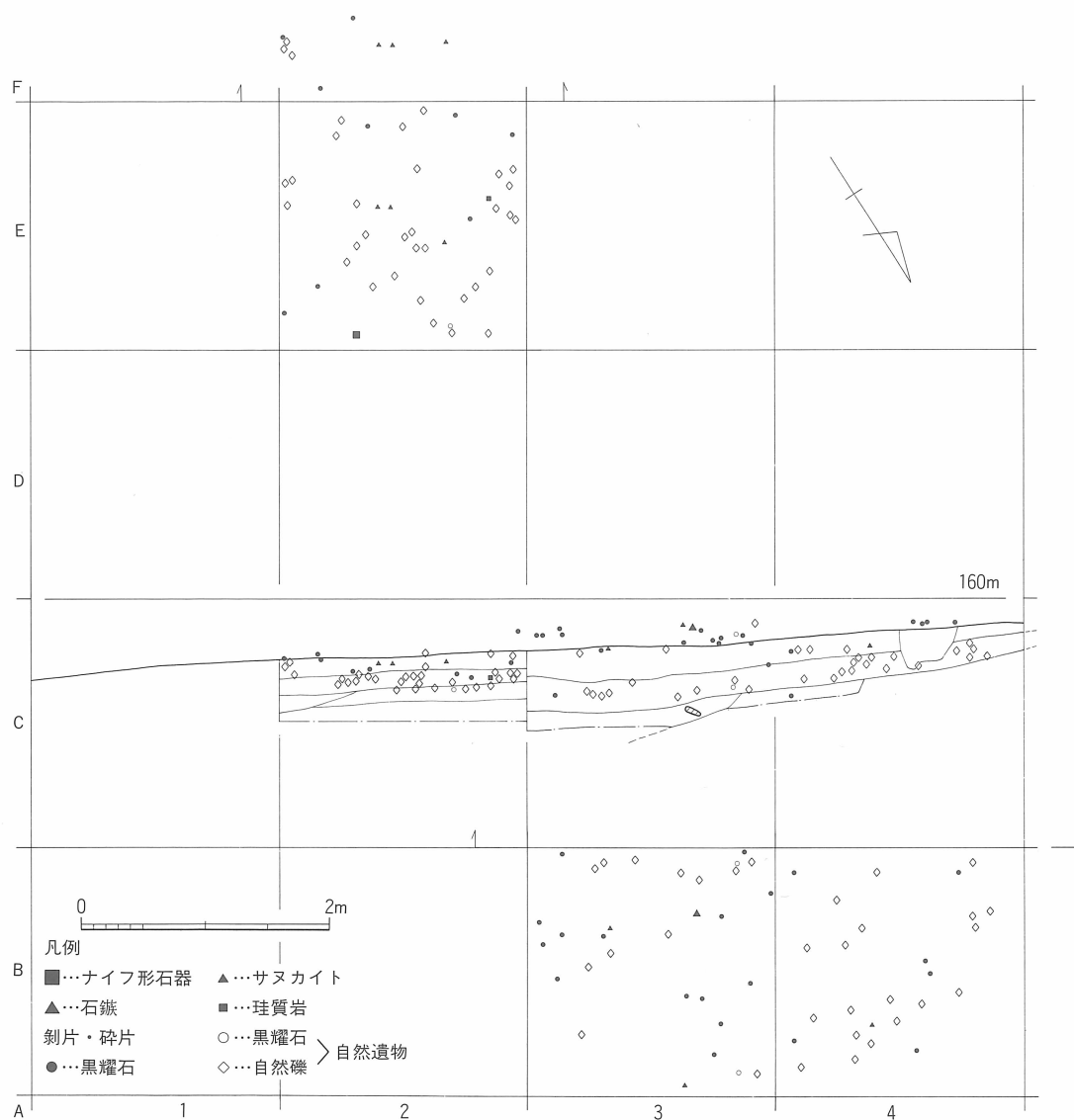
出土遺物は、上面の縄文時代の石器等の遺物を除けば旧石器時代の遺物と考えられるが、製品はナイフ形石器の1点のみであとは剥片・碎片等である。そのため出土石器群の分離・分析は難しい。

2. グリット調査区出土の遺物

旧石器時代の遺物 (図版16、第9図)

ナイフ形石器(1) 1は横長剥片を素材とする石英製のナイフ形石器である。打面の一部を除去する形で、背面側へ二次加工を行い整形している。

微細剥離を有する剥片(2) 2は微細剥離を有する剥片である。背面に自然面を残す黒曜石製の小型縦長剥片を素材とし、両側縁には背面側からの微細剥離が連続している。



第8図 ゾウメキ遺跡グリッド調査区の遺物出土状況実測図・投影図(1/60)

剥片・碎片（3～7）3は黒耀石製のやや寸づまりの剥片を素材としている。打面部は背面側からの力によって切断されている。末端部の折れについては断定し得ない。左側縁に微細剥離を有している。4は背面と主要剥離面の方向の違う黒耀石製調整剥片である。5はやや寸づまりの黒耀石製の調整剥片で背面に自然面を残す。6は黒耀石製の小型縦長剥片で背面の一面は打点部と反対方向からの剥離面を持つ。7は背面に他方向の剥離面を持つ黒耀石製の調整剥片である。

縄文時代の遺物（図版16、第9図8）

石鏃(8) 8はサヌカイト製の石鏃で右基端がほとんど無く、左右非対称である。調査区内包含層上面付近の出土である。

3. 風倒木痕出土の遺物

旧石器時代の遺物（図版16、第9図）

ナイフ形石器（9・10）9は縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。右側縁の先端と基部付近に調整加工を施す。断面は三角形を呈しており、刃部はやや厚みをもつ。31号風倒木痕中より出土。10は小型の寸づまりの剥片を素材とする。左側縁基部付近には、平坦剥離による二次加工が行われている。黒耀石製で28号風倒木痕より出土。

スクレイパー（11・12）11は縦長剥片の右側縁に刃部加工を行っているスクレイパーである。腹面にも大きな剥離が入る。サヌカイト製で14号風倒木痕中より出土。12は両面に求心状剥離を行った石核を転用したスクレイパーであろう。一部に細かい剥離が連続する刃部と考えられる部分がある。サヌカイト製で39号風倒木痕より出土。

剥片・碎片（13～17）13はサヌカイト製の縦長剥片で自然面を残し、断面は三角形を呈している。9号風倒木痕より出土。14は無調整打面を加撃し、剥離されたチャート製の縦長剥片である。背面の一部に自然面を残す。3号風倒木痕より出土。15はサヌカイト製の小型縦長剥片である。作出の無調整打面を加撃し、一定方向に連続剥離を行っていることからやや幅広であるが、真正の石刃と言えよう。9号風倒木痕より出土。16は無調整打面を加撃し剥離されている。珪岩製の縦長剥片である。22号風倒木痕より出土。17はサヌカイト製の幅広の剥片で、半分以上を欠損する。背面の剥離は多方向である。7号風倒木痕より出土。

縄文時代の遺物（図版16、第12図）

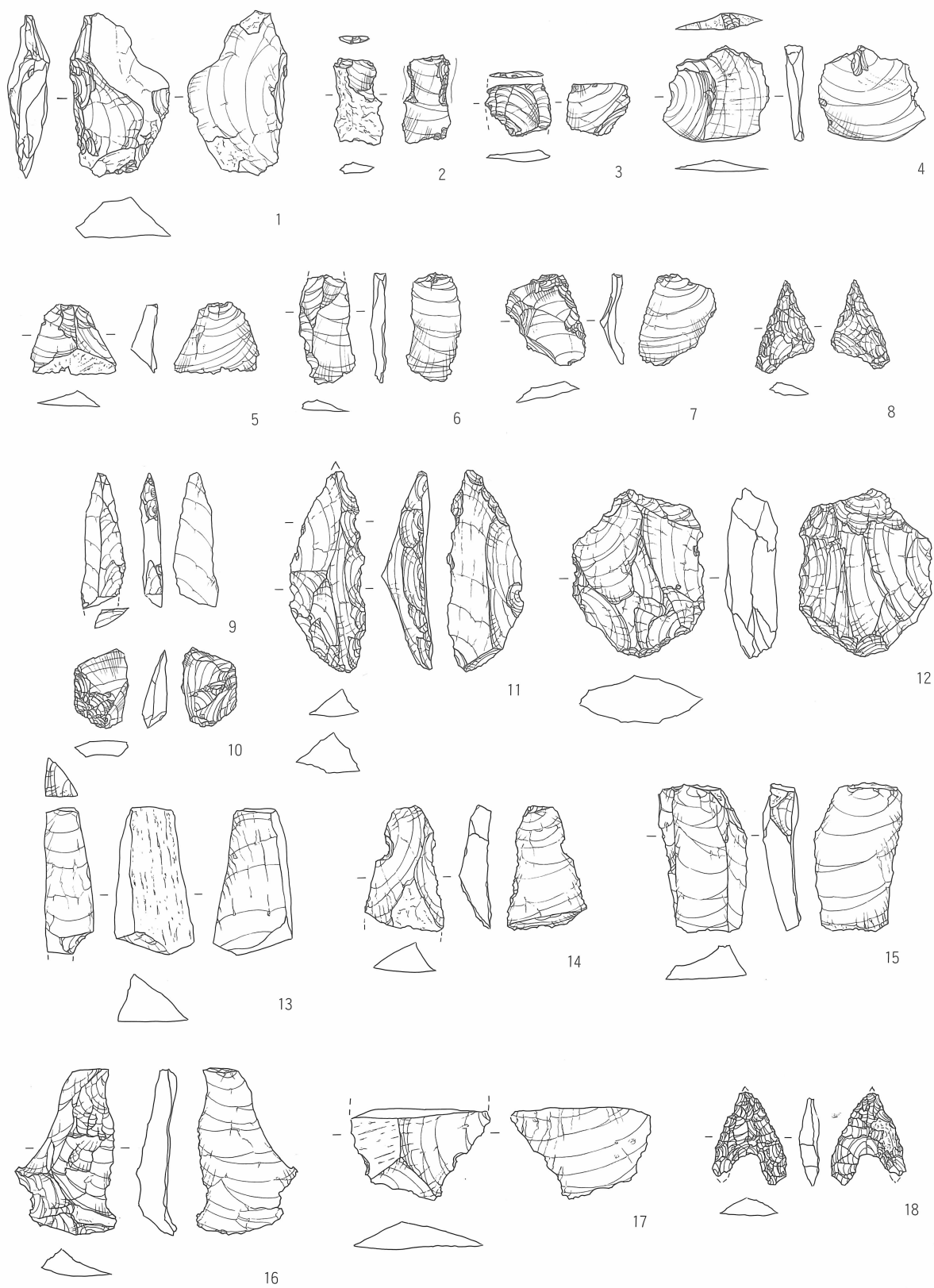
石鏃(18) 18は黒耀石製の石鏃で早期の鍬形鏃であろう。2号風倒木痕より出土。

石斧(42) 42は偏平の礫を素材とした石斧と考えられる資料である。「刃部」には細かい剥離が観察されるが、研磨の痕跡については判断し難い。石材は変岩質である。62号風倒木痕から出土。

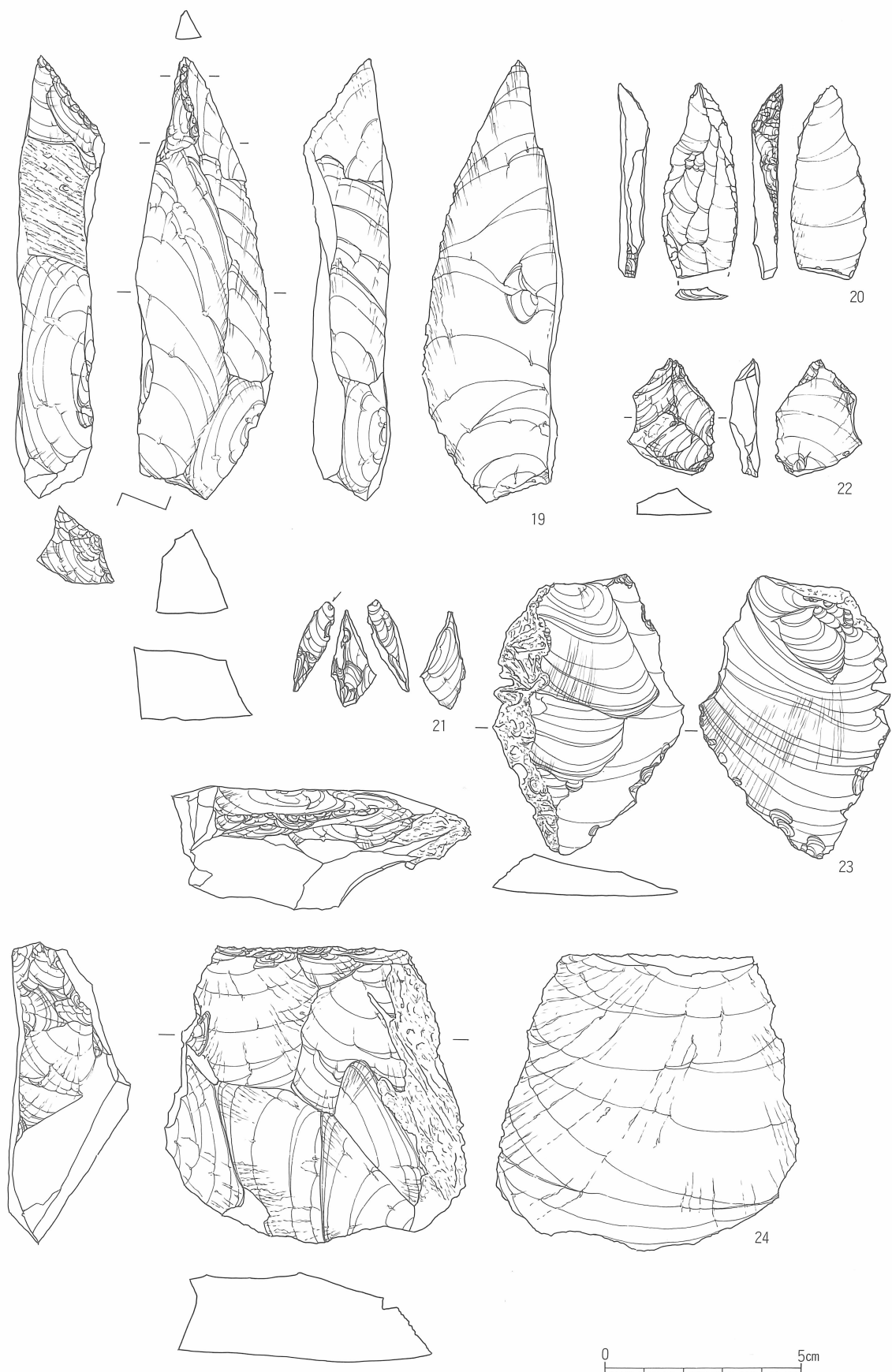
土器 28号風倒木痕から、早期の条痕文土器片が出土している。

弥生時代の遺物

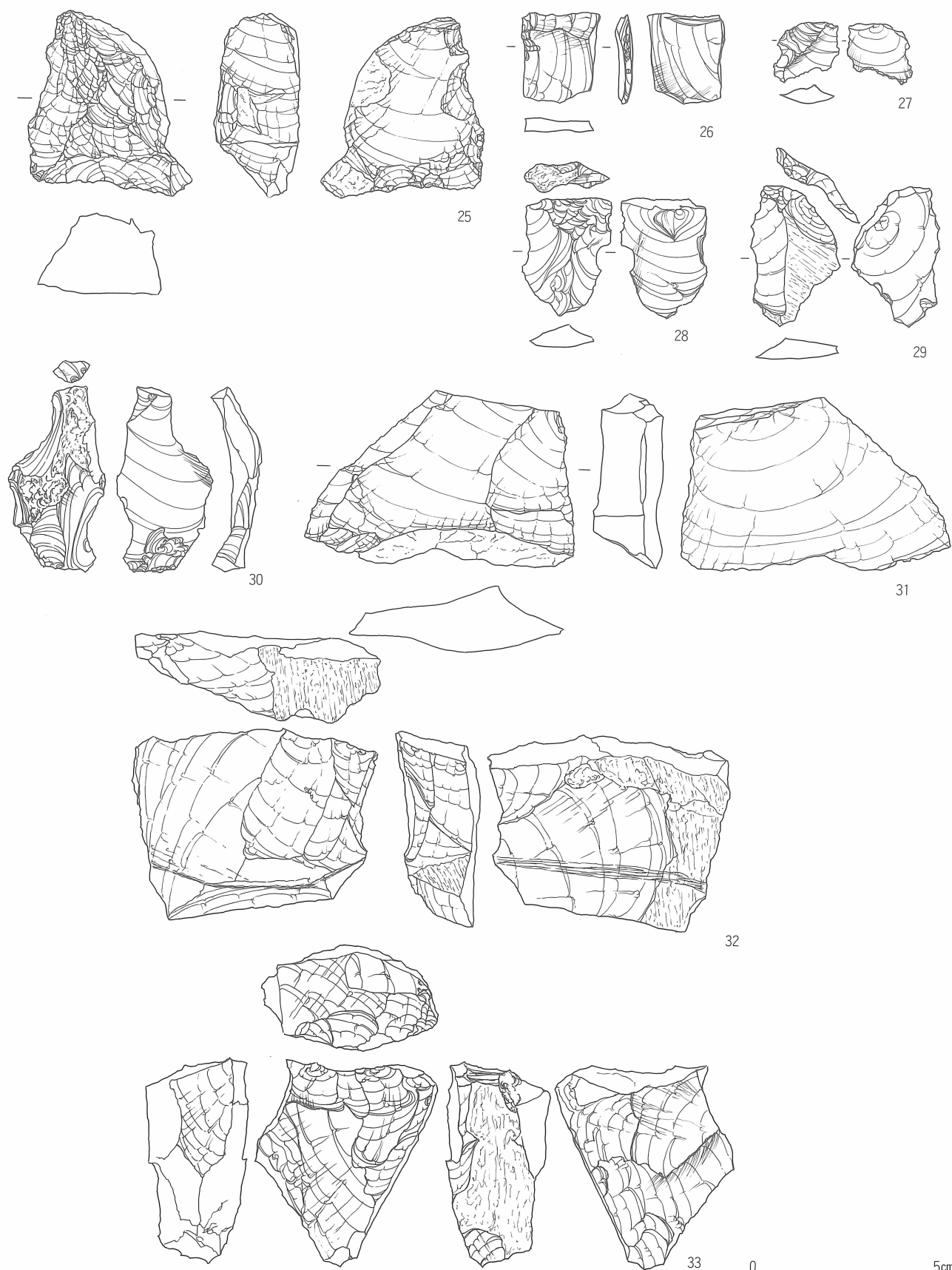
試掘調査時に、36号風倒木痕から土器細片が出土した。



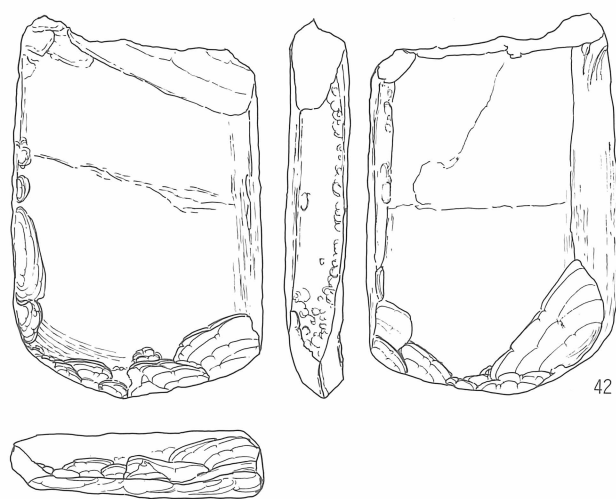
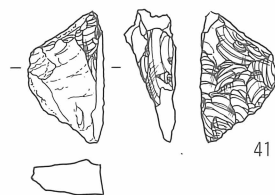
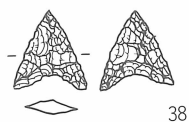
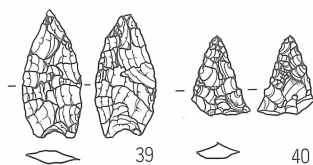
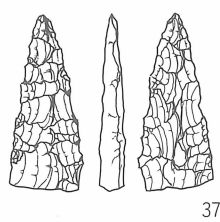
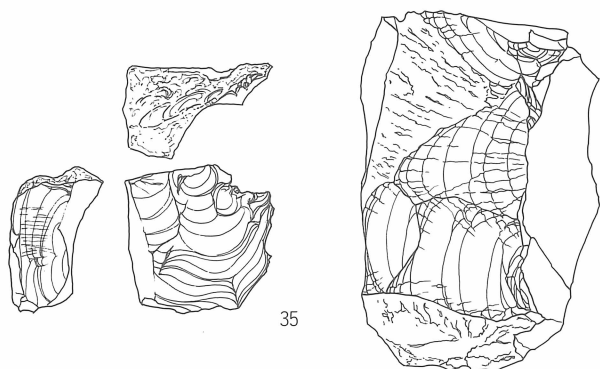
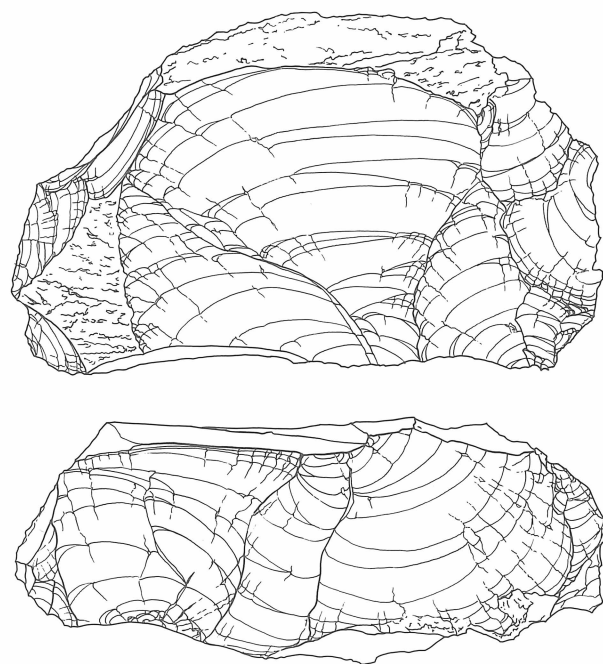
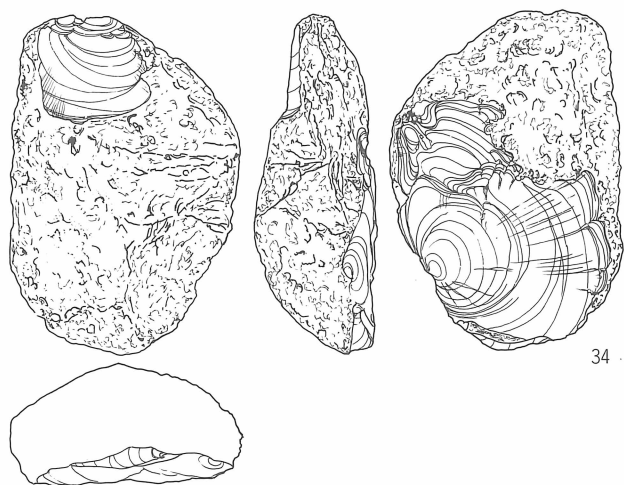
第9図 ゾウメキ遺跡出土・表採石器実測図① (2/3)



第10図 ゾウメキ遺跡出土・表採石器実測図② (2/3)



第11図 ゾウメキ遺跡出土・表採石器実測図③ (2/3)



0 5cm

第12図 ゾウメキ遺跡出土・表採石器実測図④ (2/3)

4. 表採遺物

旧石器時代の遺物（図版16、第10～12図）

ナイフ形石器（19・20）19は分厚い縦長剥片を素材とする、サヌカイト製のナイフ形石器である。背面を構成するネガ面は多方向であり、かつ打面調整を行っている。また先端部の背面中央の稜には稜上調整が行われている。厚い刃部を確保しながらも尖頭器状に仕上げようとしたのだろう。20は黒耀石製の石刃を素材とする、二側縁加工のナイフ形石器である。背面と腹面の剥離方向は同一であり、刃潰し加工によって打面部は除去されている。

彫器（21）21はすづまりの剥片の打点部から末端部にかけてファシットの入る彫器である。黒耀石製。

スクレイパー（22～25）22は自然面と作出打面との稜を加撃して得られた珪質岩製の剥片を素材としている。背面の剥離方向は多方向で末端を加工し尖頭状となる。23は自然面を直接加撃して剥離した黒耀石製の幅広大型剥片を素材としている。右側縁の一部に加工がある。24はサヌカイトの大型剥片を素材としている。背面の剥離方向は多方向で打面部は折りとられている。その末端部に細かい剥離が連続しており、刃部として使用されたのだろう。25は背面が多方向からの剥離による分厚い剥片を素材とし、末端部腹面に刃部加工を行っている。珪質岩製。

剥片・砕片（26～31）26は石英製の剥片の打面部と端部を切断した剥片である。端部の折れ面には微細剥離がある。27は黒耀石製のすづまりの剥片で調整剥片である。28は自然面を打面とした、透きとおる良質の黒耀石製剥片である。29は打面調整を行い、斜軸状に剥離された剥片である。珪質岩製。30は背面の剥離面が多方向で自然面を大きく残す黒耀石製の剥片である。31は珪岩製の大型の横長剥片である。

石核（32～36）32は一部に調整を行った打面を固定し、縦長剥片を連続して剥離している。また作業面と反対側面には横方向からの剥離面があり一部打面が転移されている。珪岩製。33は打面調整を行った後、縦長剥片を連続剥離している。その作業面と反対の面には別方向からの剥離面があり、打面転移を行っている。珪質岩製。34は厚みがあるものの偏平な黒耀石の原石の両極から剥離を行っている。35は自然面を一定の打面とする黒耀石製の石核である。36はサヌカイト製の大型の原礫を石核としている。打面は一定に固定されず、頻繁に転移を行っている。

縄文時代の遺物（図版17、第12図）

石槍（37）37は基部側を大きく欠損するサヌカイト製の石槍である。丁寧な平坦剥離を連続させて仕上げている。他の出土遺物との関係から縄文早期に属するものと考えられよう。

石鏃（38～40）38は左右の基端が鋭く尖り、石英製。39はやや長胴で基端はわずかで、サヌカイト製。40は基端側を欠損、黒耀石製。バリエーションがあるが、おおむね縄文早期に収まる資料である。

スクレイパー（41）41は半面調整を行い、一部を刃部として使用しているスクレイパーである。折れ面には微細剥離が残されている。早期にみられるタイプであろう。

第4章 おわりに

第1節 風倒木痕について

時 期

完掘した55基のなかで、遺物出土例は表1～4・6に示すように12基のみで、旧石器・同剥片や縄文早期の石鏃、局部磨製石斧および縄文早期土器片や弥生土器片が若干の風倒木痕の埋土からわずかに出土した。

したがって、上記の各遺物出土の風倒木痕の時期については、各風倒木痕が当該出土遺物の時期を上限とすること以外には、明確な時期は不明である。

しかし、弥生土器片出土の36号や縄文早期の石鏃出土の13号を含む若干の風倒木痕を除き、風倒木痕内の各埋土の境界線（痕平面プランおよび土層断面）および埋土と地山（西丘陵西緩斜面部では風倒木痕切り込みは主に自然堆積土）の境界線を検出する際、各土層・地山の色相が互いに影響し合って、容易には検出し得なかったことは、これらの風倒木痕が相当に古期のものであることを示している。

上記の検出状況は、他遺跡での風倒木痕でも同様の例が多く、平面プラン境界での識別線引き作業が困難で、押型文・曾畑式土器など古い時期の縄文土器片が出土することが多く、旧石器が出土する例もある。

また、当遺跡では、除去した表土や遺構検出作業時での旧石器・同剥片の出土は多かったが、土器片の出土は皆無に近い状態であった。

以上のことから、上述の若干例を除き、風倒木痕の時期について、旧石器時代～縄文時代前期前後の古い時期、あるいはそれ以上の相当に古い時期のものと思われる。

上記のことに加えて、当遺跡では、永い期間にわたって約550基の風倒木痕が複雑に重複出土したものであるが、各風倒木痕の時期決定についての大略を、①風倒木痕の重複による新・古関係と、②埋土平面プランの方向分類から、次項で検討する。

風倒方向

当遺跡出土の風倒木痕の風倒方向に言及する前に、再度、第3章 第2節で紹介した栗崎遺跡出土土風倒木痕について例証してみる。

栗崎遺跡出土風倒木痕

第4図中に表記した土層のなかで、0～2層は栗崎遺跡のモデル土層で、0層は旧表土及び1層上位に所在した地山層を含むものである。

1・2層についても、風倒木痕周辺の高所で所在する地山である。

①埋土1'～4'の全体的特徴

4号では、痕平面プランのなかで4'が東寄りに1'・2'が中央部に、3'は周辺部全体でもより西側に広範囲に、それぞれ位置する。

なお、1・3号では4'が東半部・3'が西半部に対峙するように位置するが、これは削平によるもので、削平前は3'が4'の東側に及んでいたことが4号例から考えられ、上記特徴例としてよく、ゾウメキ遺跡では、第2図のアミ部でこの4'に相当する埋土の埋土平面プランを示した。

②東西断面の特徴

4号の床面には、検出面からの深さ32cmの最深部が、痕平面プランのほぼ中央部にピット状に所在し、この埋土2'下面は段状を呈しながら、全体的には西側へと高くなることが指摘でき、2・3号も同様である。

2'下の3'下面も、同様に段状を呈し、全体的には西側へと高くなることが指摘でき、1～3号も同様である。

4'は、底面まで4'全体が接することも指摘でき、1～3号も同様である。

また、2'・3'下面の傾斜角度は、東半部よりも西半部の方が小さく、緩傾斜をなすことも指摘でき(1号も同様)、1・3号では1'下面までも同様のことが指摘できる。

なお、最深部のピットは、主根部痕と考えられ、ゾウメキ遺跡^{〔註1〕}の53・63号例について既述したとおりである。

③南北断面部の特徴

4号の床面には、東西断面同様のピット状のものが所在し、埋土は3'で、東西断面の2'とは異なるが、1・3号のピット状のものの埋土が2'・3'であることから、このピット状のものも主根部痕の一部と考えられる。

また、床面全体の形状は、南北両端部が低く、中央部が盛り上がっている(壁面沿いに浅い落ち込み部が一周する)ことが看取され(2号東西断面も同様)、2号南北断面、3号両断面でも同様の傾向にある。

なお、上記特徴の痕床面プランは、完掘した2号でその全様が把握できたことから、痕平面プランの壁面に沿う浅い落ち込みは、主根ではなく、放射状に広がった枝根痕(枝根が風倒時に包握して跳ね上げた地山窪地)と看取でき、ゾウメキ遺跡でも3・13・64号で既述のとおりである。

以上の埋土の堆積状態や前章6頁以下で説明した痕平面プラン・埋土平面プランの特徴は、1～4号例に非常に類似する点が多く、この4例が非常に類似した状態で風倒し、非常に類似した方向に風倒し、また、非常に類似した原因で風倒したことを示すものと考えられる。

ところで、既述したように、埋土平面プランは、2号の1'・4'を例外として、1'～4'はいずれも長軸A方向に細長である。

上記のことから、風倒方向を長軸方向として北方あるいは南方とし、2'は風倒木の主根を含む根に近い幹部(幹元部)の腐食部痕とすることも考えられる。

しかし、既述のように、1～4号のいずれも風倒木地山跳ね上げ土の4'が、南北方向最大径296cm(3号例)・東西方向最大径86cm(1号例)の規模の大塊のままで痕平面プランの東端部(1・3号例)あるいは東寄りに位置する(2号例)ことや、1'～4'下面の傾斜が東西断面西半部の方が同断面東半部よりも緩傾斜をなすことから、風倒方向を両方と考える方が最良である。

上記のことは、既述した長軸A(長軸A'・B'も長軸Aに替用することができる)の方向が、1号でN-31°-E、2・4号でN-22°-E、3号でN-25°-Eをそれぞれ測り、その計測値は非常に類似し、換言すれば、1～4号はそれぞれの長軸A(A'・B')と直交するN-59°-W(1号)、N-68°-W(2・4号)、N-65°-W(3号)の非常に類似した方向、平均すればN-65°-Wの大略西方向に勢力が非常に強い大型台風によって風倒したと考えられる。

以上のような栗崎遺跡の風倒木痕の調査事例証から、以下、ゾウメキ遺跡の風倒木痕の風倒方向を検討する。

当遺跡でも、上述の栗崎遺跡例の1'～4'のように埋土を細分して埋土平面プランを1/20で作成していれば、出土風倒痕数も栗崎遺跡(出土総数6基)とは比較にならない約550基前後に及ぶことから、より詳細な検討が可能であろうが、当遺跡では、諸般の事情で、第2図に示すように、4'層

に相当する風倒木による地山跳ね上げ土（アミ部）のみの検出・1/100平板実測のみとなった。

第13図は、第2図中の西丘陵北端部中央の痕平面プランの平板実測図の一部で、表1～4中の風倒方向の計測根拠を示したものである。

栗崎遺跡例で既述してきたように、風倒方向は長軸A・A'・B・B'・B''・Cや土層断面などを総合的に検討して決定すべきであろうが、上述のように4'相当の埋土平面しか測量していないため、ゾウメキ遺跡では、第4図の栗崎遺跡例の長軸Dに相当する基線を計測した。

第4図に示すように、痕平面プラン内側での4'の接線Dは、4号では長軸Aと平行し、1号では長軸Aよりも若干西に傾き、3号では長軸Aより逆に若干東に傾く。

しかし、1号での西への若干の傾きと3号での東への若干の傾きを平均すれば、4号同様に長軸Dは長軸Aとほぼ平行するものとしてよく、換言すれば風倒方向を計測する際、長軸Dも、長軸A同様に有効な基軸としてよいものと考えられる。

加えて、栗崎遺跡での4'の埋土平面プランは、1号例がほぼ直線状を呈し、ゾウメキ遺跡（第13図）の116・117・133号などの形状に類似し、3号例が内湾しつつ両端部が丸味を呈し、119号や第2図の136号などの形状に類似する。

以上のことなどから、ゾウメキ遺跡では、長軸Dを基軸とし、地山跳ね上げ土が存在する方向とは逆方向にこの基軸と直交する第2・13図中の矢印方向を以って風倒方向としたものである。

第14図は、上記方法で得た風倒方向を図示したもので、方向が一致あるいは方向差が1°～2°間にある例が、N-36°～38°-W間で119・124・136・156号、N-14°～15°-W間で113・141号、S-65°～70°-E間で115・130・135・138号、S-55°～57°-E間で13・108号、S-49°～50°-E間で102・104・116・158号、S-30°～35°-E間で3・33・103・114・150号、S-21°～22°-E間で137・140・155号、S-2°～4°-E間で125・159号、S-10°～13°-W間で11・148・149号、N-78°～79°-W間で120・132号、N-44°～46°-W間で117・123号の計32基が認められ、以上は方向計測全68基の47%を占める。

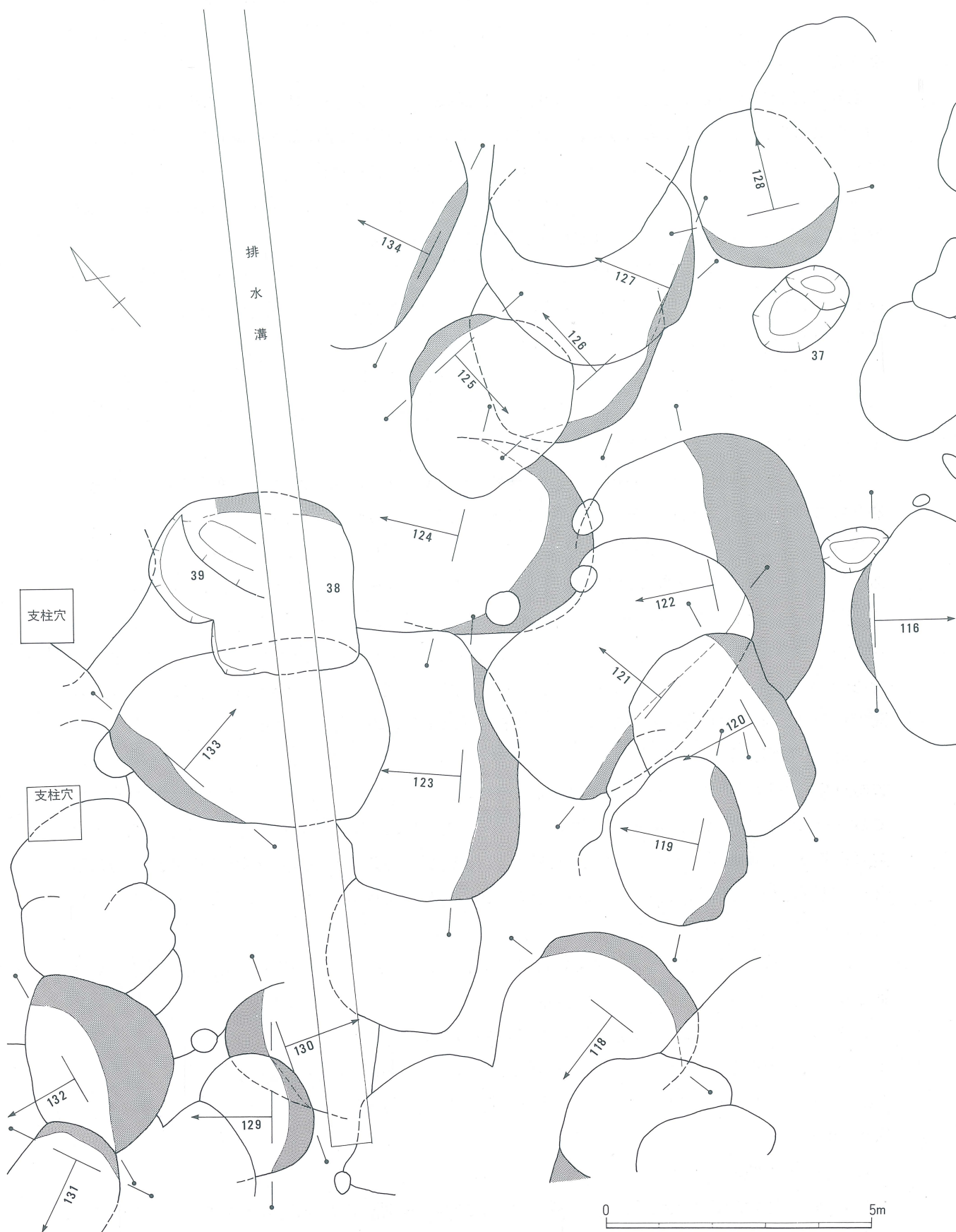
また、第13図のように、⑦方向差0°～3°で近接する例が約半数を占めることと、栗崎遺跡出土の方向がN-59°-W（1号）、N-68°-W（2・4号）、N-65°-W（3号）で、④1～4号間の方向差が6°であったことから、⑦方向差±6°内に近接するものを一群として分類基準の第1とし、また、重複関係を考慮し、④A群とB群（121号と124号、126号と127号は別群）、E群とF群（103号と104号は別群）、F群とG群（106号と159号は別群）、J群とA群（123号と124号は別群）などとA～J群の計10群およびK・L群に区分して掲図した。

ところで、表5①～④は、表1～4で個別に註記した切り合いによる新・古関係を、前述の群区別を考慮して新←古で整理したものである。

整理に際しては、最も多くの重複関係例を新・古相関基準として表5①を作成し、表5①ではA群より新しい群列やB・J群より古い群列がないため、表5②の重複関係例を表5①下段に追記し、表5①・②の新・古相関基準を用いて表5③を、同様に表5④を追記した（○印は第2図中の無番号風倒木痕）。

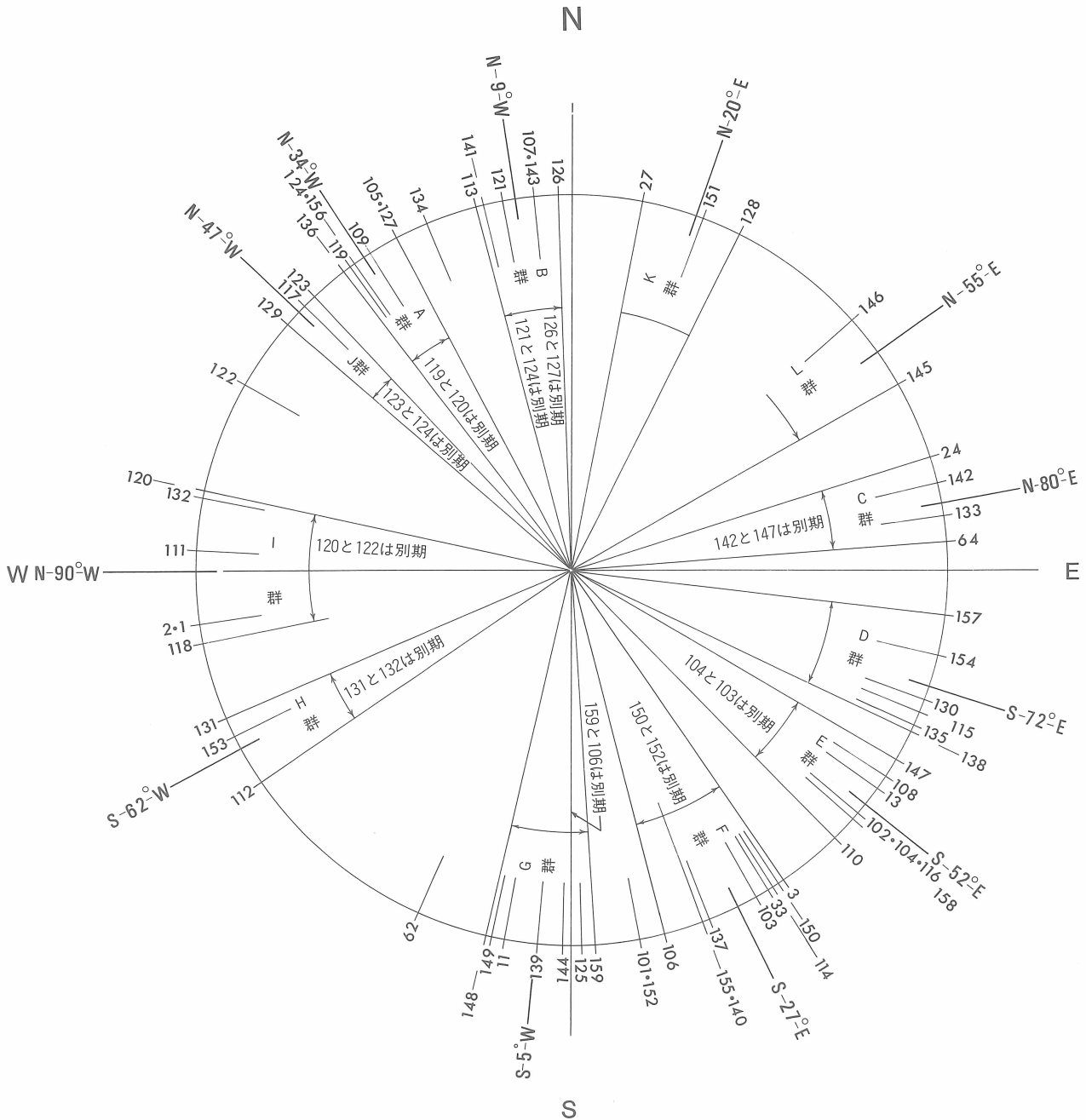
表5①～④を検討すると

- ①. C組の重複関係列（例）から、A群は更に2別群（別期）の $A_2 \leftarrow A_1$ に分け得る。
- ②. j組の重複関係列（例）から、B群は更に2別群（別期）の $B_2 \leftarrow B_1$ に分け得る。
- ③. b～d組の重複関係列（例）からも、B群は別期の $B_2 \leftarrow B_1$ に分け得る。



第13図 ゾウメキ遺跡検出風倒木痕の痕平面プラン平板実測図 (1/100)

- ④. b~d・j・k組の重複関係列 (例) から、G群は更に2別群 (別期) の $G_2 \leftarrow G_1$ に分け得る。
- ⑤. b~e・g・i~m組の重複関係列 (例) から、D群は更に2別群 (別期) の $D_2 \leftarrow D_1$ に分け得る。
- また、
- ⑥. ア~クの仮時系列下での新・古関係は不明であるが、別期 (別群) のまま (例えば、イ時系列下の A_2 とHやFや、キ時系列下の D_1 と B_1 とDとの切り合い関係による新・古関係は不明であるが、



第14図 ゾウメキ遺跡完掘・検出風倒木痕の風倒方向

表1 ソウメキ遺跡の完掘風倒木痕一覧表①

番号	風倒方向	風向群	痕規模	痕深度	出土遺物・重複関係（新←古）・挿図番号等
1	S-82°-W	I 群	422×314	66×5	〔第5図〕
2					
3	S-35°-E	F群	278×224	50×0	4←3 〔第5図〕
4	?	?	312×264	37×8	4←3 〔第5図〕
5	?	?	206×118	41×20	6号より新しい。 〔第5図〕
6	?	?	300×約180	未掘	5号より古い。 〔第2図〕
7	?	?	350×?	未計測	103より新しい 〔第2図〕
8	?	?	282×186	71×35	8←103←104 〔第6図〕
9	?	?	220×180	未計測	〔第2図〕
10	?	?	400×310	未計測	〔第2図〕
11	S-10°-W	G群	600×480	未計測	〔第5図〕
12	?	?	360×?	未計測	106←12←159 〔第2図〕
13	S-55°-E	E群	304×252	70×0	〔第5図〕
14	?	?	約318×238	69×23	〔第6図〕
15	?	?	280×240	未計測	〔第2図〕
16	?	?	190×160	未計測	〔第2図〕
17	?	?	220×210	未計測	〔第2図〕
18	?	?	270×190	未計測	〔第2図〕
19	?	?	228×200	74×22	112より新しい。 〔第6図〕
20	?	?	190×180	未計測	〔第2図〕
21	?	?	190×140	未掘	〔第2図〕
22	?	?	130×100	未掘	〔第2図〕
23	?	?	150×140	未計測	〔第2図〕
24	N-73°-E	C群	284×202	52×4	〔第5図〕
25	?	?	640×約480	未計測	112より新しい。 〔第2図〕
26	?	?	160×約160	未掘	〔第2図〕
27	N-11°-E	K群?	296×62	57×0	〔第2図〕
28	?	?	260×180	84×7	〔第6図〕
29	?	?	210×170	未計測	〔第2図〕
30	?	?	約250×110	未掘	61←70←31 $\swarrow$ 115 $\searrow$ 30 〔第2図〕
31	?	?	430×約260	未計測	61←70←31 $\swarrow$ 115 $\searrow$ 30 〔第2図〕
32	?	?	384×84	67×9	〔第5図〕
33	S-32°-E	F群	348×72	64×6	〔第5図〕
34	?	?	190×約150	未計測	35←34←116 〔第2図〕
35	?	?	350×340	未計測	35←34←116 〔第2図〕

表2 ゾウメキ遺跡の完掘風倒木痕一覧表②

番号	風倒方向	風向群	痕規模	痕深度	出土遺物・重複関係（新←古）・挿図番号等
36	?	?	270×100	59×9	弥生 土器細片 [第7図]
37	?	?	200×130	未計測	[第2図]
38	?	?	440×約360	未計測	同一風倒木痕。 [第2図] 119←120←121←124←122 38・39←133←123 38・39←124←122 127←125←126
40	?	?	342×108	76×22	同一風倒木痕。 [第6図]
41	?	?			
42	?	?			
43	?	?	440×250	未計測	同一風倒木痕。 [第2図]
44	?	?			
45	?	?			
46	?	?	238×154	55×10	[第7図]
47	?	?	200×100	未計測	[第2図]
48	?	?	260×198	78×6	[第7図]
49	?	?	152×138	96×12	[第5図]
50	?	?	100×80	未計測	[第2図]
51	?	?	194×144	44×7	51←52 [第6図]
52	?	?	約182×120	22×10	51←52 [第6図]
53	?	?	276×198	48×9	[第7図]
54	?	?	約370×236	38×0	55と重複 [第6図]
55	?	?	254×?	49×0	54と重複 [第6図]
56	?	?	140×120	未計測	[第2図]
57					おとし穴 [第3図]
58	?	?	260×210	未掘	[第2図]
59	?	?	294×216	33×12	[第7図]
60	?	?	198×186	37×16	[第7図]
61	?	?	350×220	未計測	[第2図]
62	S-24°-W	?	396×332	90×13	[第5図]
63	?	?	202×164	44×7	[第7図]
64	N-86°-E	C群	270×198	42×0	[第5図]
65					[欠番]
66					[欠番]
67					[欠番]
68					[欠番]
69					[欠番]
70	?	?	230×?	未計測	61←70←31 ↙115 ↘30 [第2図]
71	?	?	250×160	未計測	[第2図]
72	?	?	122×70	25×10	[第2図]
73	?	?	218×198	37×3	[第2図]
平均			約319×約236	56×10	

痕規模平均は101～159号風倒木痕を含む

痕規模：長径×短径

痕深度：最深×最浅

単位：cm

表3 ゾウメキ遺跡の検出風倒木痕一覧表①

番号	風倒方向	風向群	痕規模	痕深度	出土遺物・重複関係 (新←古)
101	S-11°-E	?	約250×200		風倒方向が152と一致
102	S-50°-E	E群	約250×200		風倒方向が104・116と一致
103	S-30°-E	F群	約400×?		8←103←104
104	S-50°-E	E群	360×約290		風倒方向が102・116と一致。8←103←104
105	N-28°-W	A群	320×250		風倒方向が127と一致
106	S-15°-E	F群?	210×180		106←12←159
107	N-6°-W	B群	270×約240		風倒方向が143と一致。108←107
108	S-57°-E	E群	350×260		108←107
109	N-33°-W	A群	290×260		
110	S-45°-E	E群	410×290		
111	N-87°-W	I群	360×310		
112	S-56°-W	H群	約300×?		
113	N-15°-W	B群	約400×260		113と114は重複。風倒方向が134と一致
114	S-33°-E	F群	約260×230		114と113は重複。
115	S-68°-E	D群	約250×約150		61←70←31 $\swarrow$ 115 $\searrow$ 30
116	S-50°-E	E群	450×約320		風倒方向が102・104と一致。35←34←116
117	N-46°-W	J群	370×290		
118	S-79°-E	I群?	約400×約370		
119	N-37°-W	A群	320×260		119←120←121←124 $\swarrow$ 122 $\searrow$ 123
120	N-78°-W	I群	390×290		119←120←121←124 $\swarrow$ 122 $\searrow$ 123
121	N-11°-W	B群	540×約330		119←120←121←124 $\swarrow$ 122 $\searrow$ 123
122	N-61°-W	?	約550×約460		38・39←124←122。 119←120←121←124 $\swarrow$ 122 $\searrow$ 123
123	N-44°-W	J群	約530×約370		38・39←133←123。 119←120←121←124 $\swarrow$ 122 $\searrow$ 123
124	N-36°-W	A群	約570×約390		風倒方向が156と一致。127←125 $\swarrow$ 124 $\searrow$ 126。 38・39←124←122
125	S-2°-E	G群	約350×310		127←125 $\swarrow$ 124 ←122 $\searrow$ 126 $\searrow$ 123
126	N-2°-W	B群	約400×350		127←125 $\swarrow$ 124 ←122 $\searrow$ 126 $\searrow$ 123
127	N-28°-W	A群	約430×400		風倒方向が127と一致。127←125 $\swarrow$ 124 ←1227 $\searrow$ 126 $\searrow$ 123
128	N-27°-W	K群?	320×約270		
129	N-50°-W	J群	230×約220		129←130
130	S-70°-E	D群	290×約270		129←130
131	S-67°-E	H群	? ×約210		131←132
132	N-79°-W	I群	360×280		131←132
133	N-82°-W	C群	530×約350		38・39←133←123
134	N-23°-W	?	約500×?		
135	S-66°-E	D群	250×180		
136	N-38°-W	A群	370×290		
137	S-22°-E	F群	370×290		
138	S-65°-E	D群	480×340		138←139

表4 ゾウメキ遺跡の検出風倒木痕一覧表②

番号	風倒方向	風向群	痕規模	痕深度	出土遺物・重複関係（新←古）
139	S-5°-W	G群	430×約360		138←139
140	S-21°-E	F群	340×260		風倒方向が155と一致
141	N-14°-W	B群	約490×?		143←142←147←141
142	N-77°-E	C群	約360×320		143←142←147←141
143	N-6°-W	B群	390×330		風倒方向が107と一致。 143←142←147←141
144	S-1°-E	G群	310×260		144←145
145	N-61°-E	L群?	330×290		144←145
146	N-49°-E	L群?	約410×?		
147	S-60°-E	E群	460×420		143←142←147←141
148	S-13°-E	G群	約400×?		
149	S-12°-E	G群	?×?		
150	S-34°-E	F群	360×250		150←152
151	N-21°-E	K群?	310×290		151←155←156 154←153
152	S-11°-E	?	320×310		風倒方向が101と一致。 150←152
153	S-64°-W	H群	210×180		154←153 151←155←156
154	S-77°-E	D群	320×230		154←153 151←155←156
155	S-21°-E	F群	約240×160		風倒方向が140と一致。 151←155←156 154←153
156	N-36°-W	A群	約410×280		風倒方向が124と一致。 151←155←156 154←153
157	S-83°-E	D群	500×440		
158	S-49°-E	E群	190×約130		
159	S-4°-E	G群	?		106←12←159
風倒方向平均	A群N-34°-W, B群N-9°-W, K群N-20°-E, L群N-55°-E, C群N-80°-F, D群S-72°-E E群S-52°-E, F群S-27°-E, G群S-5°-W, H群S-62°-W, I群N-90°-E, J群N-47°-W				

風倒方向平均は1～73号風倒木痕を含む。

痕規模：長径×短径

痕深度：最深×最浅

単位：cm

いずれも同一期ではない)としてよい。

以上のことから、当時遺跡からは少くともA₁・A₂・B₁・B₂・C・D₁・D₂・E・F・G₁・G₂・H～Lの16期に及ぶ風倒木痕群が出土したと言え、無番○印の風倒木痕を含めて、多くの風倒木痕についての最低限度の調査、埋土平面プランの検出作業の未実施が残念である。

最後に、痕平面プランが最大規模で遺存した25号(640cm×480cm)・11号(600cm×480cm)・122号(550×460cm)などの例から、短絡的に樹齢1,000年以上の巨木の風倒木痕とし、仮算術的に(1,000年)×(16期以上)=16,000年以上の永にわたるゾウメキ遺跡出土の大風倒木痕群こそ、旧石器時代からの遠古の歴史を、深く黒木の山々に刻み込んだ文化財そのものと指摘して結としたい。

表5 ゾウメキ遺跡出土・検出風倒木痕組列表

①	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
a				38・39 ? ← 133C ← 123J ←			○	
b							126B ₁	
c	○ ←	127A ₂ ←		125G ₂ ←		124A ₁ ←	122 ?	
d		119A ₂ ←	120I ←	121B ₂ ←				
②	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
e					○ ←	129J ←	130D ₁	
f		131H ←	132I ←	○ ←	○ ←	○ ←	○ ←	
③	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
g			106F ←	12 ? ←	159G			
h						108E ←	107B ₁	
i			(138D ₂ ←	139G ₂)		138D ₁	139G ₁	
j				143B ₂ ←	142C ←	147E ←	141B ₁	
k							○ ←	148G ₁
l	151K ? ←	155F ←	156A					
m	154D ₂ ←	153H ←	○					
n	8 ? ←	103F ←			104E			
④	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
o			1・2I ←	○				
p		4 ? ←	3 A					
q				144G ←	145 ?			
r		150F ←	152 ? ←	○				
s				35 ? ←	34 ? ←	116E		
t			71 ? ←	61 ? ←	70 ? ←	31 ? ←	115D	
u							30 ?	

○印は第2図中の無番風倒木痕

註1 第4図の3号例での東西断面部のa傾斜角は14°、b傾斜角は76°を測る。同様に、4号例でのa傾斜角は20°、b傾斜角は70°を測り、3・4号例共に、a傾斜角の西側床面がb傾斜角の東側床面に対して著しく緩傾斜を呈す。

第2節 石器について

本遺跡で出土、採集された石器はかなりの数であるが、遺跡内が攪乱、削平を受けており本来的な石器群の復元はできない。ここでは、個別石器の観察から技術的にみた石器群の可能な限りの位置付けと問題点を指摘するに留めたい。なお、回収された旧石器時代に属すると考えられる石器群の組成は、ナイフ形石器5点、彫器1点、スクレイパー6点、石核5点の他、剥片、碎片類等となり、あとは縄文時代の石器群である。これ等の石器は、本来的に時期差を内包したものであり、幾つかにグルーピングできる。ナイフ形石器からみると、19の一群や20をとはじめとする一群があり、石核からみると、32、33の一群がある。

19のナイフ形石器はサヌカイト製の大型縦長剥片を素材として、一部に稜上調整を行い尖頭器状態に仕上げている。この種のサヌカイトを産出する原産地は、北部九州では佐賀県の老松山や多久があり、19は同県小城町周辺で採集される縦長剥片素材の石器群に酷似している。またここでは、器種としてはナイフ形石器と報告しているが、厚みのある剥片に稜状調整を介在させる製作技術は角錐状石器（三稜尖頭器）にも認められる。両者の技術的関係については、この石器が角錐状石器（三稜尖頭器）に時間的に前後するの可否か、考えていく必要があろう。

ところで、この石器の背面剥離構成は多方向であり、24のスクレイパーも同様に背面剥離構成は多方向である。そして36の石核の剥片技術は打面を頻繁に転移していることから、これら大型サヌカイト石器の一群は同一技術基盤のもとに組成する可能性が高い。ただ、このような石器群がサヌカイト原産地遺跡以外の地域で確認された例は少なく、この種の大型石器群がどのような形態と組成をもって消費地に搬入されるのかは注意する必要がある。また、この石器群は、老松山や多久のサヌカイト原産地開発がAT降灰以降に活発化することから、AT降灰後の年代が考えられよう。

20は良質の黒耀石石刃を素材とする、比較的大型で柳葉形を呈している。大型石刃素材の二側縁加工ナイフ形石器ということから、AT降灰期に近い時期の可能性があろう。また、黒耀石製のスクレイパーや剥片の中には、このナイフ形石器と組成するものもあろうが、それは別の石器群で検証するしかない。

32や33は一部自然面を打面として、剥片を連続剥離している。さらに側縁にも打面転移し剥離を行っている。結果として、剥離順序は別として残核は打面が転移する角礫状の多面体となる。この石核から得られる剥片は縦長剥片であっても“真正の石刃”でなく、ややすづまりぎみとなろう。これ等の剥離技術を技術基盤とする石器群はAT降灰以前の可能性も残していよう。

以上3グループの各様相から、これ等ゾウメキ遺跡の石器群は一時期の所産ではなく、AT降灰以前からナイフ形石器文化の新しい段階まで存在する可能性があると言えよう。このことから、9、10のような小型ナイフ形石器やスクレイパー、14のサヌカイト製の小型石刃などは、19等大型の一群に続く新しい時期の所産と考えられる。これに対し、古い石器群は32、33の石核等からAT降灰以前にも溯る可能性があるが、どこまで溯るのかは不明である。また、22や29の珪質岩製で背面剥離が多方向で求心状に打面を転移させる一群の存在は、後期旧石器文化とするなら、古い時期の可能性も残している。

最後に縄文早期の石器群についてであるが、石槍や石鏃、半面調整のスクレイパーという完全で

表6 ゾウメキ遺跡出土・表採石器一覧表

No.	器 種	石 質	長(m)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備 考	出土地点
1	ナイフ形石器	石英	4.20	2.50	1.05	8.30		G-29
2	微細剥離を有する剥片	腰岳系黒耀石	2.25	1.25	0.50	1.10		G-25
3	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	1.35	1.65	0.25	0.60		G- 5
4	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	2.45	1.75	0.45	2.40		G-52
5	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	1.80	2.15	0.65	1.30		G-62
6	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	(2.80)	(1.45)	0.35	1.20	打面欠	G-61
7	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	2.30	2.00	0.60	1.20		G- 1
8	石鏃	サヌカイト	2.30	1.55	0.35	0.80		G-19
9	ナイフ形石器	サヌカイト	3.40	1.20	0.50	1.60		11号風倒木
10	ナイフ形石器	腰岳系黒耀石	2.05	1.40	0.70	1.50		28号風倒木
11	スクレイパー	サヌカイト	(5.05)	1.95	1.25	8.00	先端欠	14号風倒木
12	スクレイパー	サヌカイト	4.25	3.40	1.35	18.70	石核転用	39号風倒木
13	剥片・碎片	サヌカイト	(3.70)	2.05	1.25	9.50		6号風倒木
14	剥片・碎片	チャート	3.15	2.00	0.85	3.90		3号風倒木
15	剥片・碎片	サヌカイト	3.75	2.20	0.95	7.00		9号風倒木
16	剥片・碎片	珪岩	4.15	2.60	1.05	5.20		22号風倒木
17	剥片・碎片	サヌカイト	(2.35)	3.55	0.75	4.50		7号風倒木
18	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	2.35	(1.90)	0.50	1.60	右基端欠	2号風倒木
19	ナイフ形石器	サヌカイト	11.25	3.55	2.25	85.30		表採
20	ナイフ形石器	腰岳系黒耀石	5.00	1.90	0.70	5.40	基部欠	表採
21	彫器	腰岳系黒耀石	2.50	1.15	0.70	1.20		表採
22	スクレイパー	珪質岩	2.95	2.25	0.75	4.30		表採
23	スクレイパー	腰岳系黒耀石	7.20	4.90	1.60	33.10		表採
24	スクレイパー	サヌカイト	7.55	8.70	3.10	182.90		表採
25	スクレイパー	珪質岩	5.00	4.45	2.35	47.40		表採
26	剥片・碎片	石英	(2.50)	(2.05)	0.45	2.90	両端欠	表採
27	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	1.70	1.70	0.55	1.00		表採
28	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	3.25	2.35	1.15	4.50		表採
29	剥片・碎片	珪質岩	3.80	2.45	0.80	4.90		表採
30	剥片・碎片	腰岳系黒耀石	4.95	2.60	1.40	8.60		表採
31	剥片・碎片	珪岩	5.25	7.30	1.90	48.80		表採
32	石核	珪岩	5.30	7.70	2.45	79.60		表採
33	石核	珪質岩	3.25	2.35	1.15	4.50		表採
34	石核	腰岳系黒耀石	6.90	4.70	2.45	74.20		表採
35	石核	腰岳系黒耀石	3.00	3.00	1.90	11.20		表採
36	石核	サヌカイト	7.20	11.90	5.90	476.70		表採
37	石槍	サヌカイト	(3.60)	(1.50)	0.50	2.10	基部欠	表採
38	石鏃	メノウ	1.65	1.50	0.25	0.40		表採
39	石鏃	サヌカイト	(2.45)	1.20	0.30	0.80		表採
40	石鏃	腰岳系黒耀石	(1.60)	(1.20)	0.25	0.40	左右基端欠	表採
41	スクレイパー	腰岳系黒耀石	2.65	1.55	1.05	3.10		表採
42	石斧	変岩	(7.70)	5.10	1.30	83.40		62号風倒木

はないが基本的な組成は保持していよう。特に条痕文を施す土器にともなう石器群として考えるなら、周辺では白木西原遺跡で早期と考えられる同様の石器群が押型文土器や条痕文土器と出土しており、今後石材を含めた組成を比較する必要があるだろう。

参考文献

- 松尾吉高編 「老松山遺跡」(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』第8集, 佐賀県教育委員会, 1989)
- 伊崎俊秋編 「白木西原遺跡Ⅰ」(『立花町文化財調査報告書』第7集, 立花町教育委員会, 1994)
- 伊崎俊秋編 「白木西原遺跡Ⅱ」(『立花町文化財調査報告書』第8集, 立花町教育委員会, 1995)

版 圖

1. ゾウメキ遺跡の全景と東へ南方地形（西へ北上空から）



2. 同 西丘陵区と南方地形（北上空から）





1. 遺跡の全形（北西上空から）

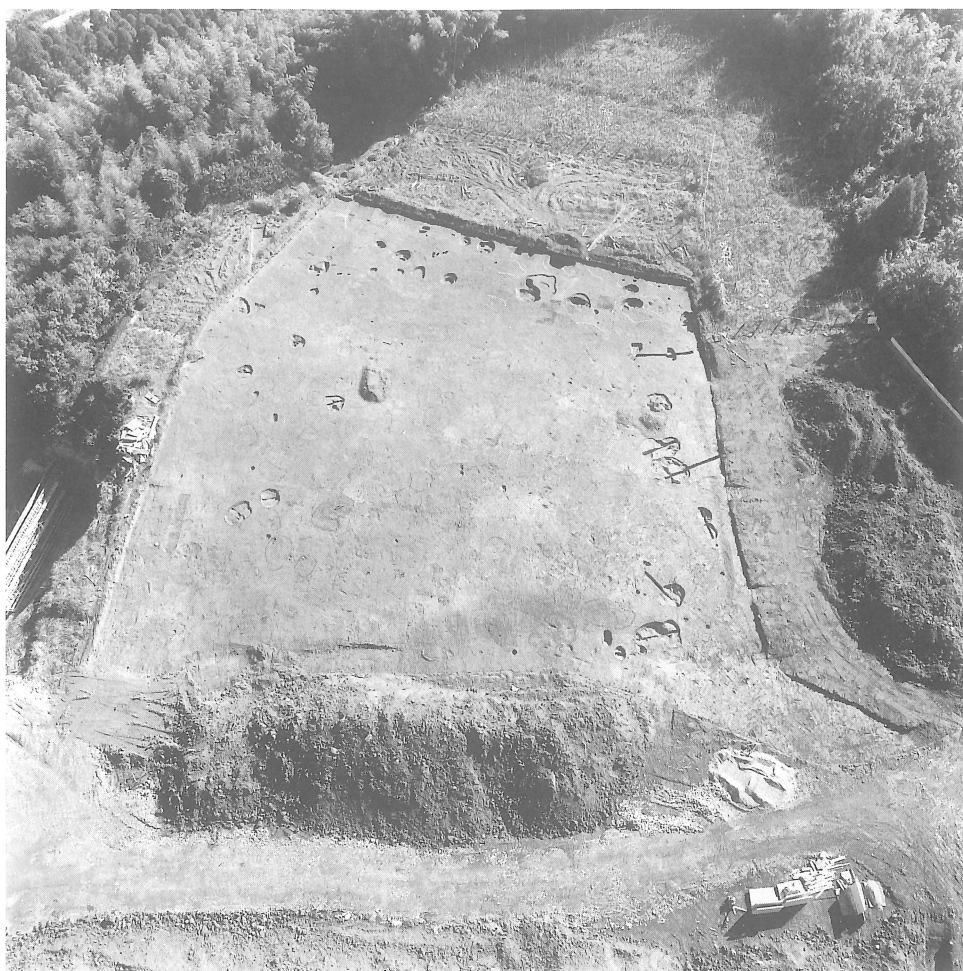


2. 同 東丘陵区と南方地形（北上空から）



3. 同 東丘陵区南西端部の風倒木痕群・おとし穴（北東中空から）

1. 遺跡の東丘陵区全景（西上空から）



2. 同、東丘陵区北半部の風倒木痕群（西中空から）





1. 遺跡の西丘陵区と東方地形（西中空から）



2. 同 西丘陵区南半の風倒木痕群（東中空から）

1. ゾウメキ遺跡完掘東丘陵区の1・4号風倒木痕
(北から)



2. 同 5・6号風倒木痕(北から)



3. 同 7号風倒木痕(北から)



4. 同 8・9号風倒木痕(北から)



1. 東丘陵区の10号風倒木痕（北東から）



2. 同 11号風倒木痕（東から）



3. 同 12号風倒木痕（北東から）



4. 同 13号風倒木痕（北東から）



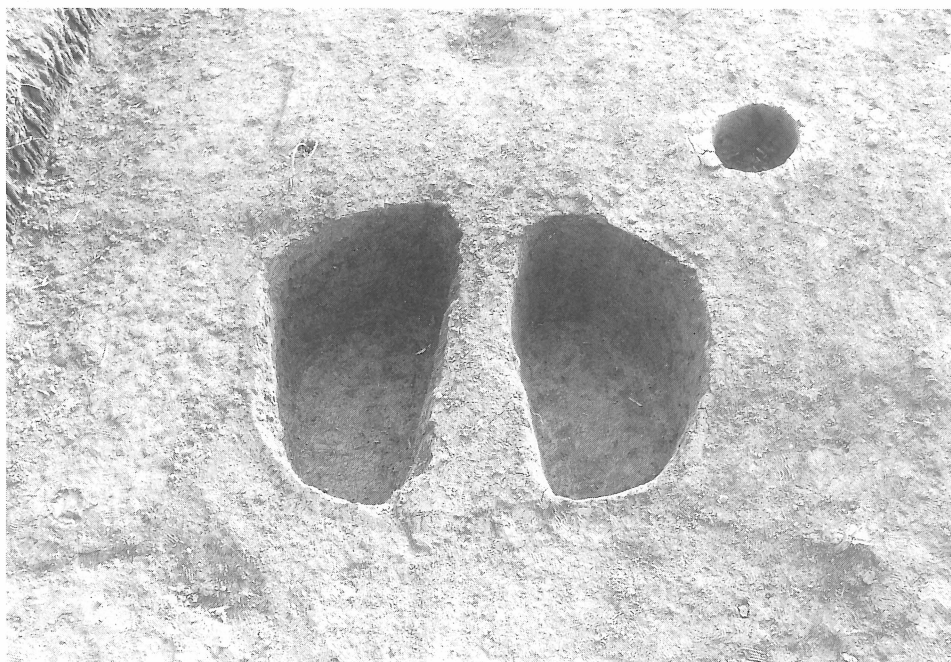
1. 東丘陵区の14、16号風倒木痕（北から）



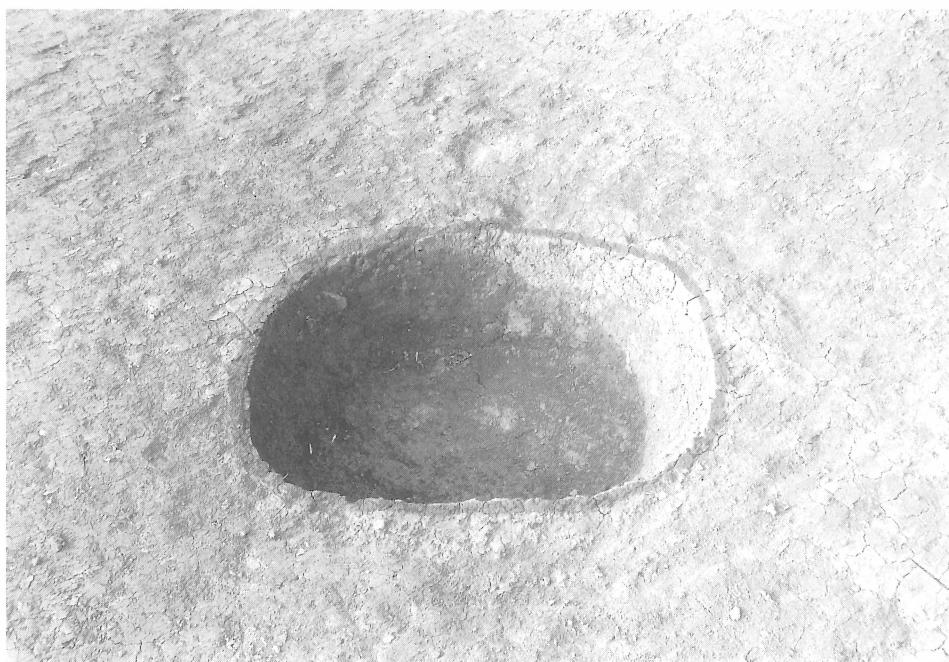
2. 同 17、19号風倒木痕（南から）



3. 同 20号風倒木痕（北東から）



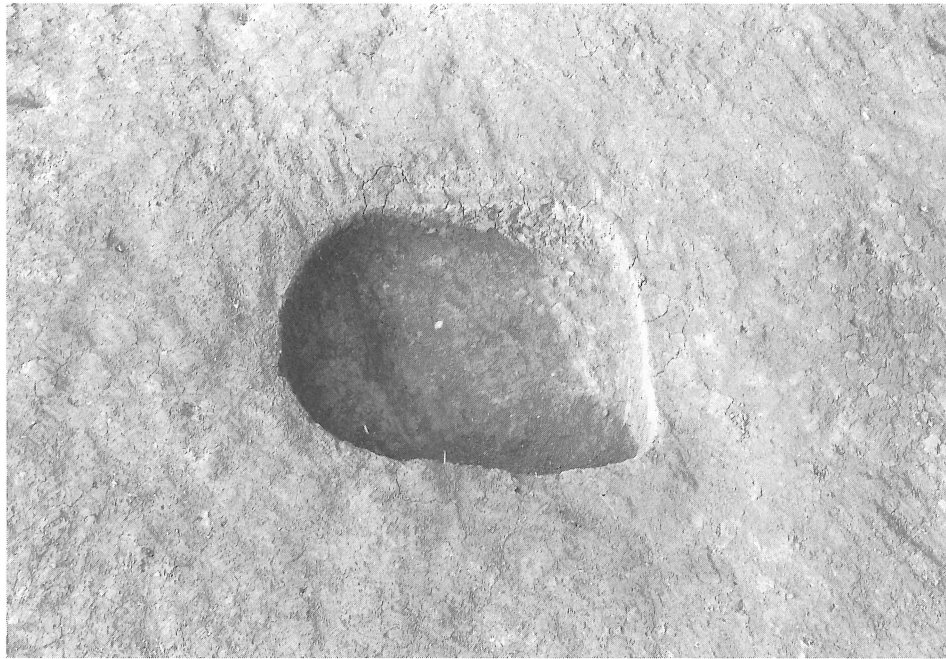
4. 同 21号風倒木痕（北から）



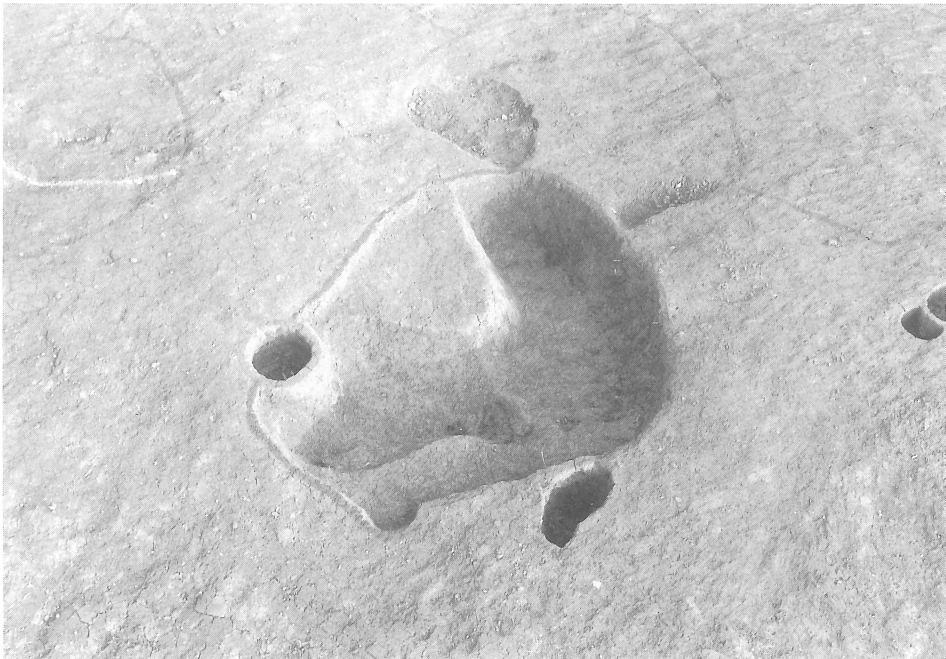
1. 東丘陵区の22号風倒木痕（北から）



2. 同 23号風倒木痕（南から）



3. 同 24号風倒木痕（北西から）



4. 同 25号風倒木痕（北西から）



1. 東丘陵区の26・27号風倒木痕（南から）



2. 同 28号風倒木痕（南から）



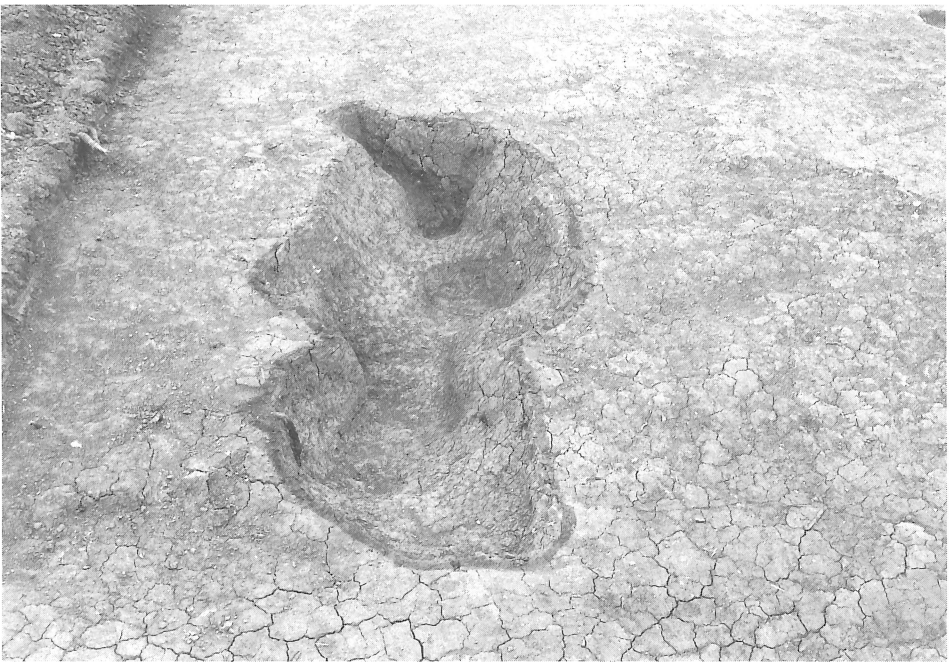
3. 西丘陵区の29・30号風倒木痕（東から）



4. 同 30・31号風倒木痕（東から）



1. 西丘陵区の32号風倒木痕（東から）



2. 同 33号風倒木痕（南西から）



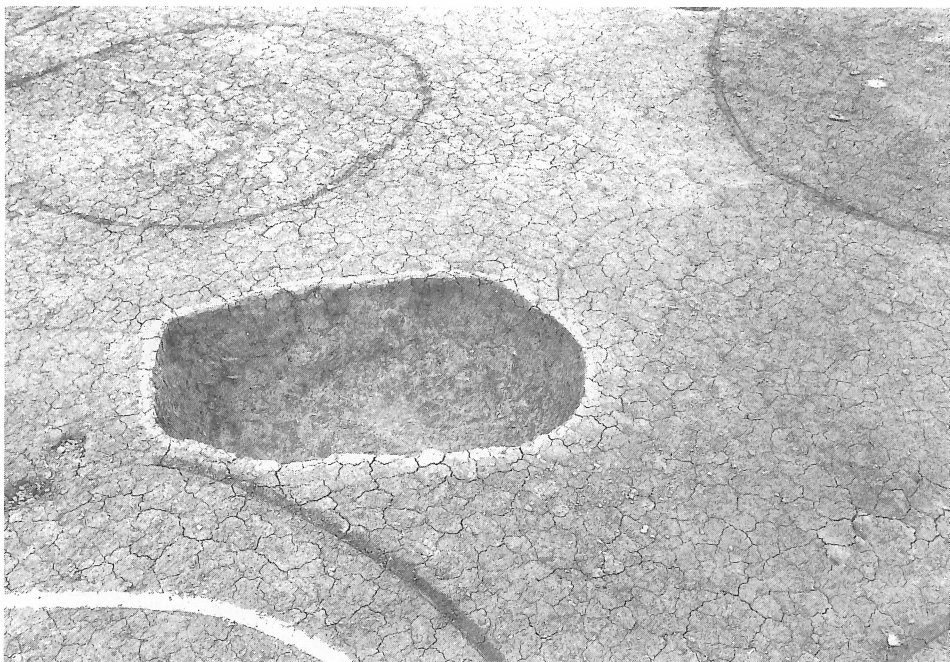
3. 同 34・35号風倒木痕（西から）



4. 同 36号風倒木痕（北東から）



1. 西丘陵区の37号風倒木痕（北から）



2. 同 38・39号風倒木痕（北東から）



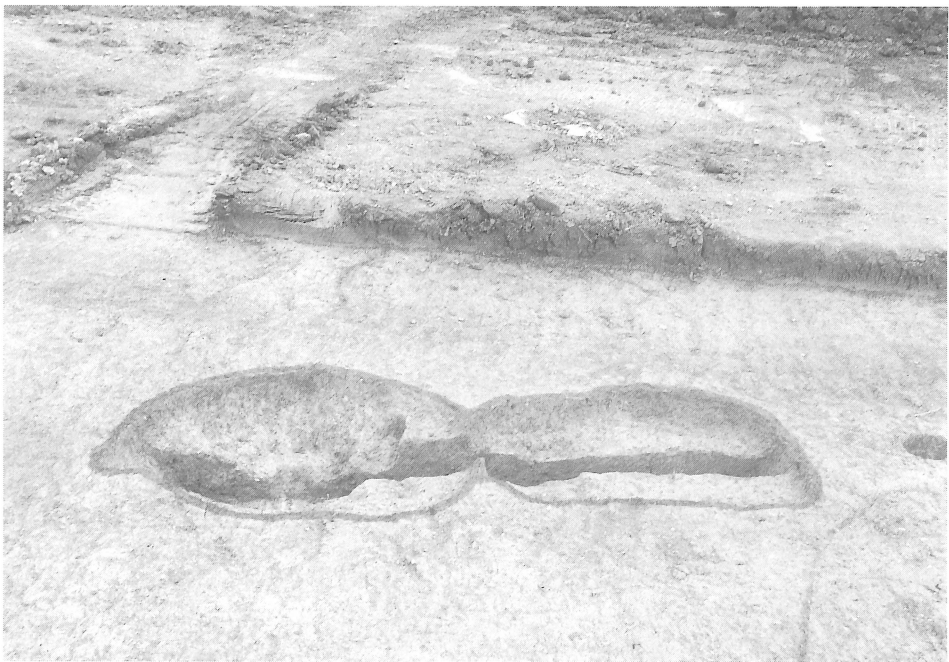
3. 同 40・45号風倒木痕（北から）



4. 同 46・50号風倒木痕（北東から）



1. 東丘陵区の51・52号風倒木痕（北から）



2. 同 53号風倒木痕（南東から）



3. 同 54・55号風倒木痕（南から）



4. 同 56号風倒木痕（西から）



1. 東丘陵区の58号風倒木痕（西から）



2. 同 59号風倒木痕（南西から）



3. 同 60号風倒木痕（西から）



4. 同 おとし穴（57号土壙）（西から）



1. 東丘陵区の62号風倒木痕（東から）



2. 同 西丘陵区の63号風倒木痕（南から）



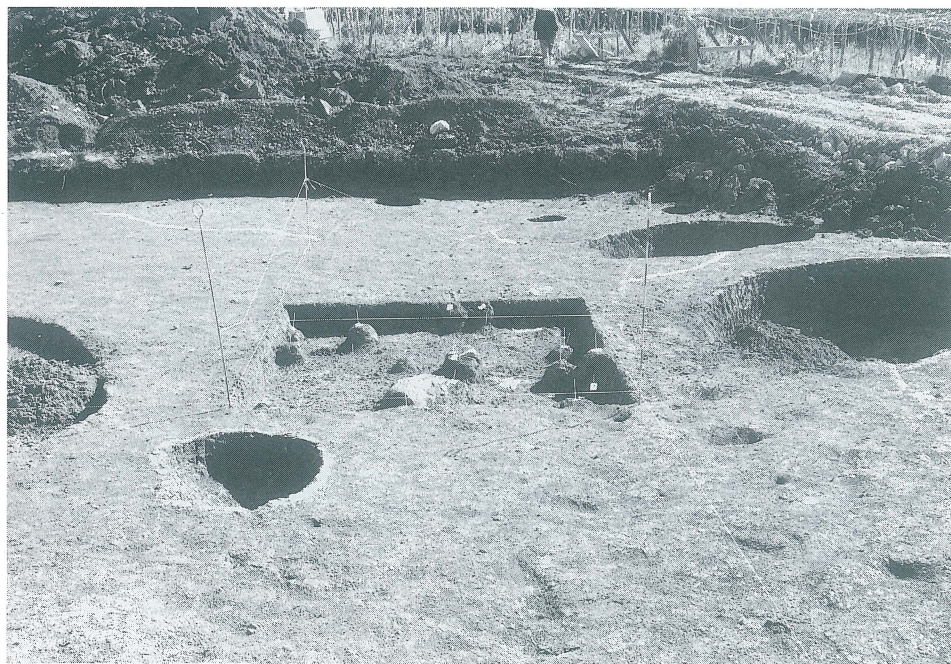
3. 同 東丘陵区の64号風倒木痕（北から）



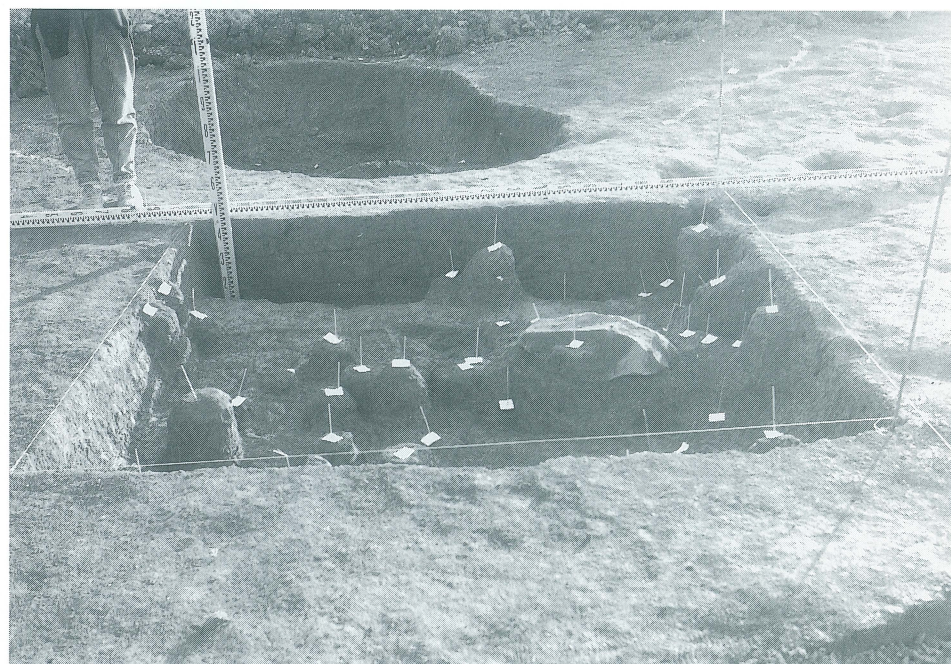
4. 同 グリッド調査区（西から）



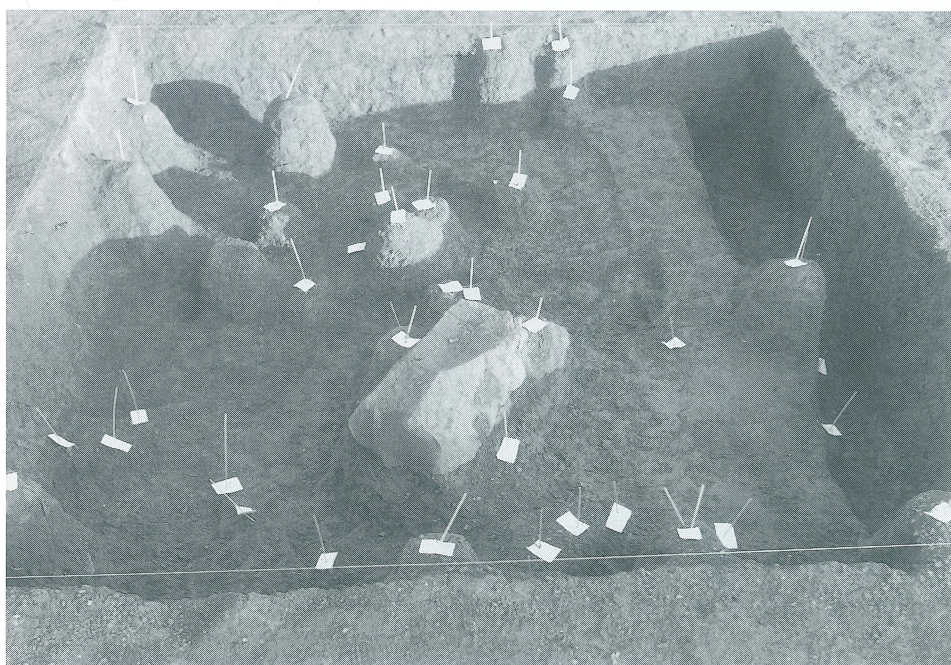
1. 東丘陵区のE-2グリッド（北西から）



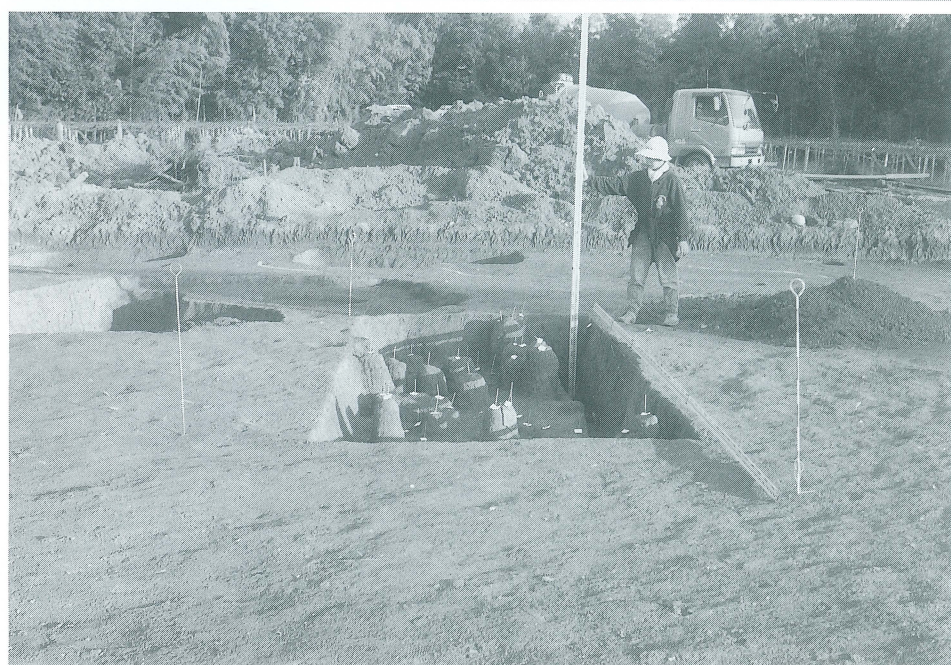
2. 同 E-2グリッド（北東から）

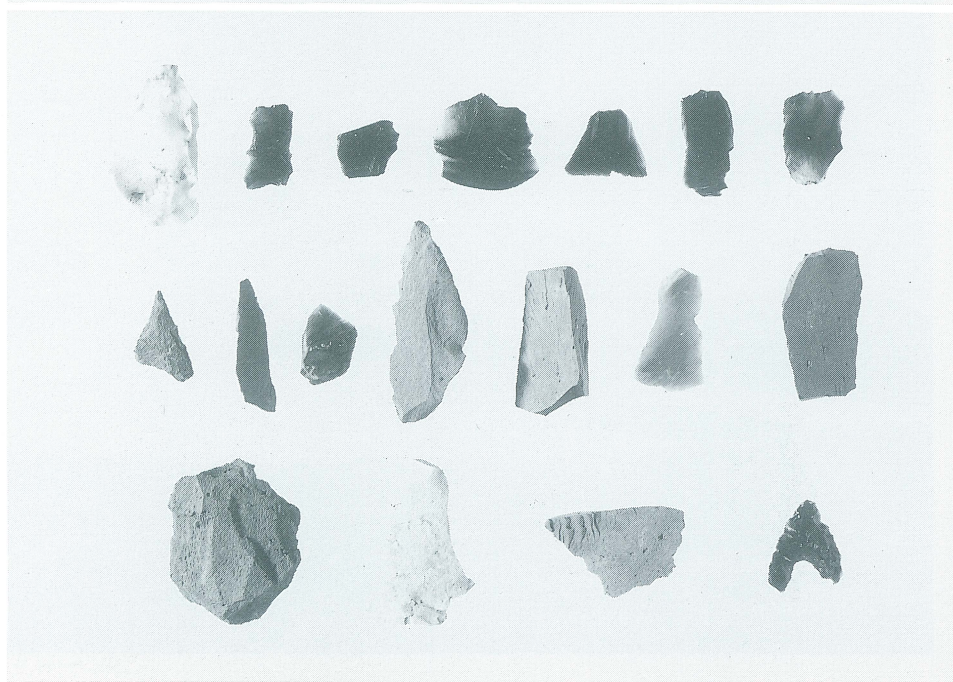
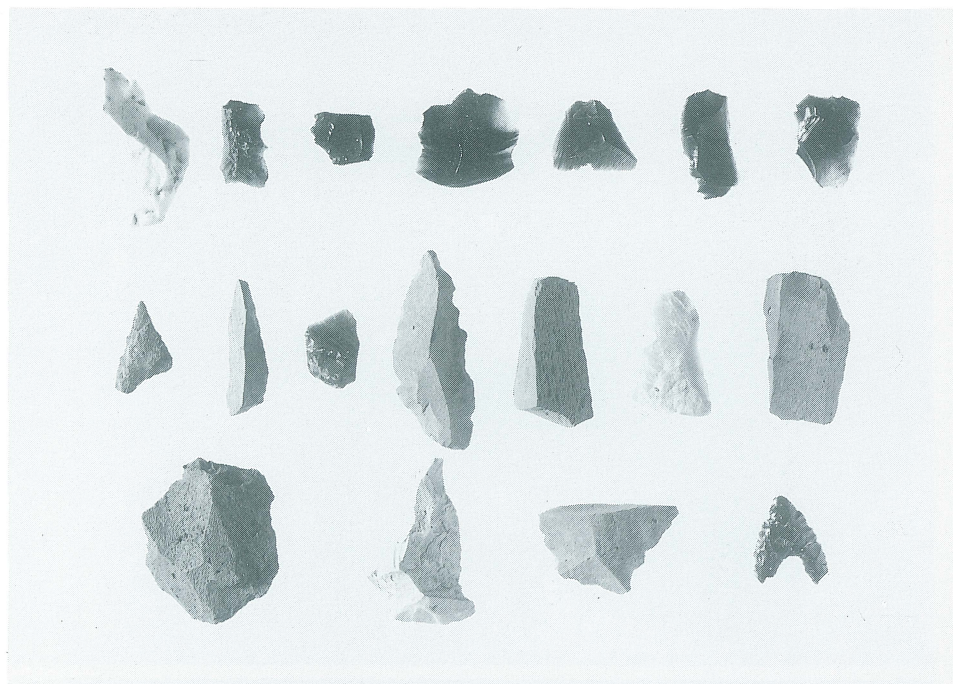


3. 同 E-2グリッド（北西から）

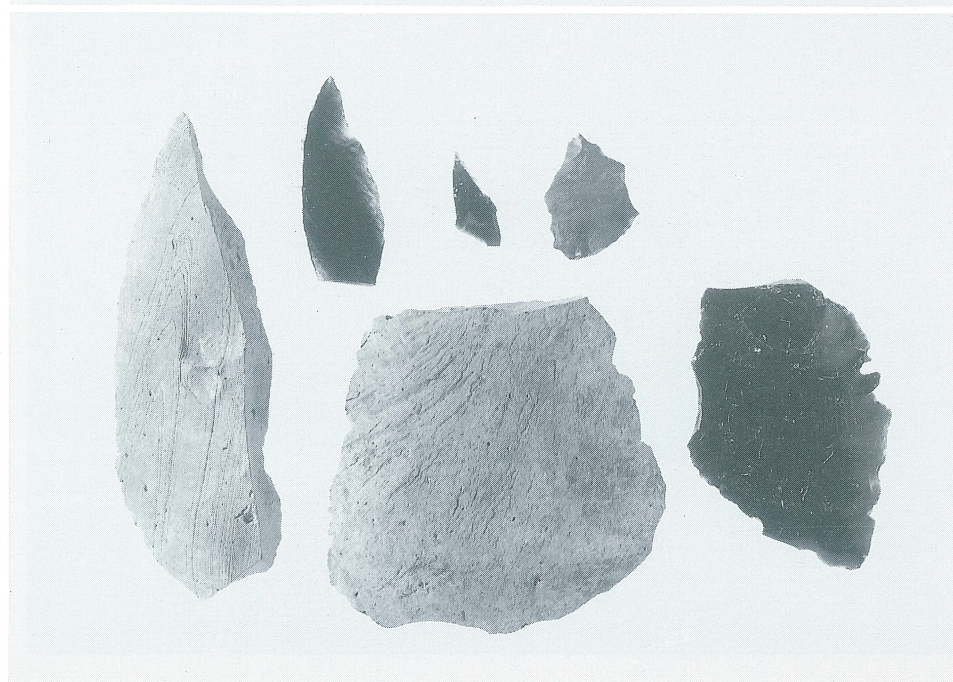
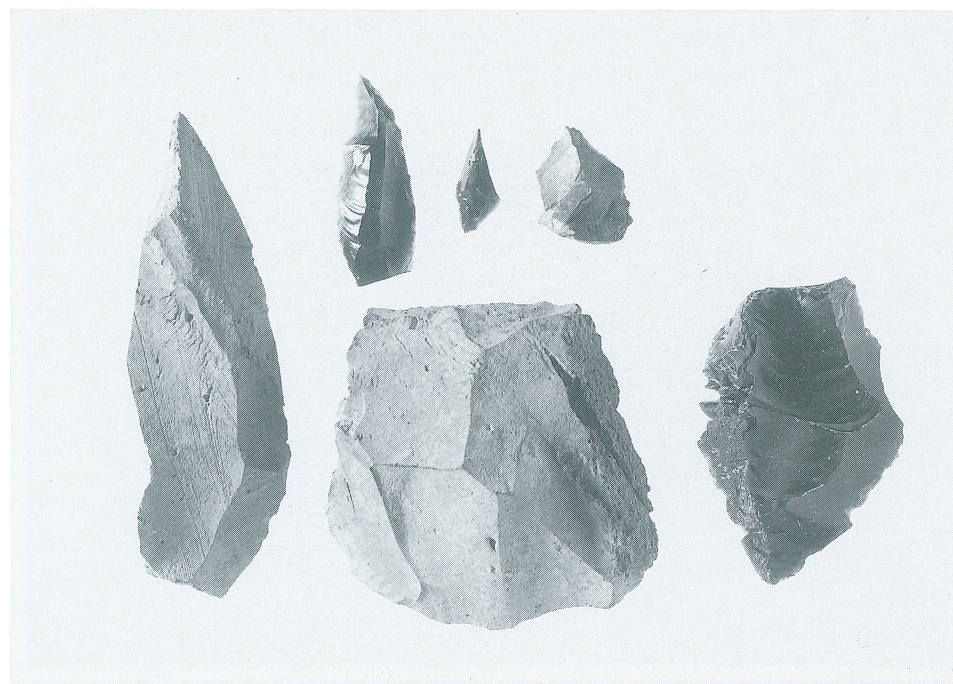


3. 同 E-3・4グリッド（北西から）





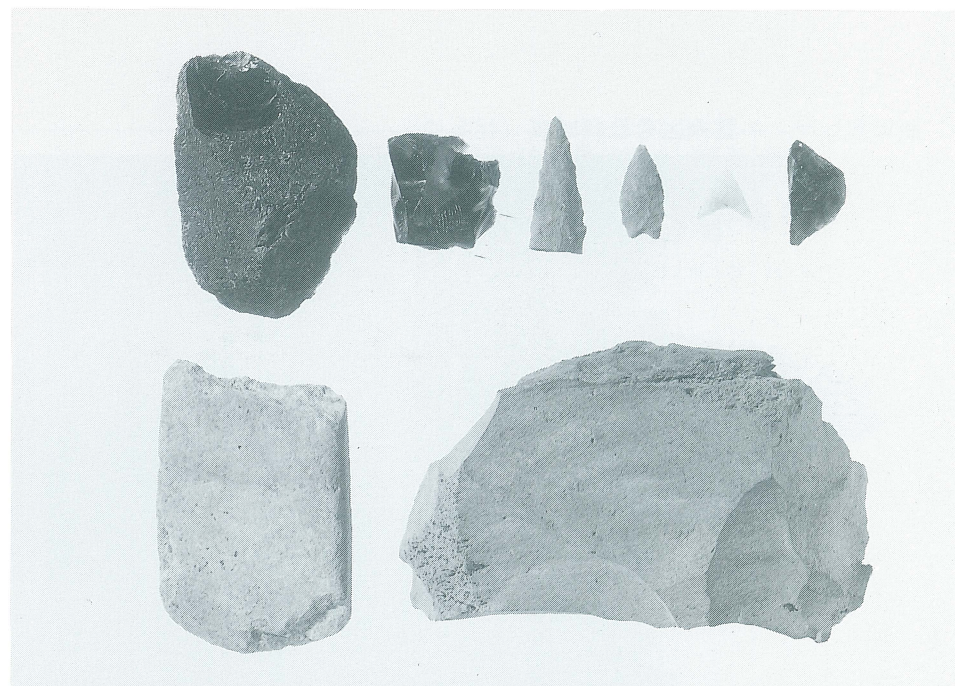
1. 同 グリッド調査区・風倒木痕出土石器 表(上)・裏(下)



2. 同 表採石器① 表(上)・裏(下)



1. 採集石器② 表(上)・裏(下)



2. 採集石器③ 表(上)・裏(下)



1. 東丘陵グリッド調査区の作業風景（北から）



2. 遺跡調査の関係者

報告書抄録

ふりがな		ぞうめきいせき						
書名		ゾウメキ遺跡						
副書名								
巻次								
シリーズ名		黒木町文化財調査報告書						
シリーズ番号		第3集						
編著者名		(編集) 馬田弘稔 (執筆分担) 馬田・杉原敏之						
編集機関 (発行機関)		黒木町教育委員会						
所在地		〒834-12 福岡県八女郡黒木町大字桑原207 TEL 0943-42-1111						
発行年月日		西暦 1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 〃〃〃	東経 〃〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ぞうめき ゾウメキ	福岡県八女郡 黒木町大字本分 2486-5外37筆	405418		33° 13′ 4″	130° 39′ 7″	19951011 ～19951120	1,152	工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ゾウメキ	散布地	旧石器 縄文早期 弥生	風倒木痕 約550箇所 おとし穴 1基 土壌 溝状遺構 柱穴様ピット		旧石器(ナイフ形石器・ スクレイパー・彫器・石 核・剥片・碎片) 縄文早期(石鏃・石槍・ 土器片) 弥生(土器片)		旧石器～縄文早期～弥 生時代の長期に及ぶ風 倒木痕群の遺存	

ゾウメキ遺跡

黒木町文化財調査報告書

第3集

1996年3月31日

発行 黒木町教育委員会

福岡県八女郡黒木町大字桑原207

印刷 株式会社 西日本新聞印刷